令和６年度　中区外国人意識調査報告書

令和６年１２月

公益財団法人　横浜市国際交流協会

はじめに

横浜市の外国人が急増している。2024 年 12 月末の外国人人口は 126,757 人で１年前の同時期から約 10,000 人も増加している。コロナ禍で減少していた外国人は、再度増加傾向にある。

全国的にも有数の外国人集住地域である横浜市中区も同様で、外国人数、人口に占める外国人比率は依然としてともに市内 18 区トップで、多文化共生は喫緊の課題になっている。

当協会では 2008 年に中区に開設された「なか国際交流ラウンジ」の運営を、中区から受託した。開設当初は多言語（英語、中国語、日本語）での情報提供及び相談、日本語教室、外国人中学生学習支援教室及び国際理解講座、多文化フェスタの開催等、ほとんどの事業はラウンジの施設内で実施されていた。

2010 年代の半ばくらいから、地域の自治会・町内会、地域ケアプラザ等から、増える外国人との共生についての相談がラウンジに寄せられるようになった。この頃からラウンジは区と連携し、通訳・翻訳等を通じて地域にアウトリーチを行っていった。

中区の策定する多文化共生アクションプランは第２期に入り、推進のポイントとして外国人へのさまざまなサポートに加え、外国人住民の地域への積極的な参画等を促している。

今回の「中区外国人意識調査」では中区在住の外国人 20 人に、さまざまな角度から中区での生活についてお聞きした。中区とともに多文化共生の施策を進めてきた私たちにとって、着実な手ごたえを感じたインタビューとなった。本調査結果を関係機関の皆さまと共有できれば幸いである。

2024 年 12 月 20 日
公益財団法人横浜市国際交流協会

目　次

第１章　調査概要 1
１．趣旨 1
（1）背景 1
（2）調査の目的 3
２．調査の実施概要 4
第２章　調査の結果 5
１．インタビュー協力者のプロフィール 5
２．生活・仕事・コミュニティ 6
（1）来日の経緯と中区への居住歴 6
（2）現在の暮らし方 8
（3）仕事 9
（4）子育て・子どもの教育 11
（5）コミュニティ 13
（6）日本語の習熟度と日本語学習 16
（7）生活に必要な情報の入手や困りごとの相談 21
（8）社会変動の影響 25
３．中区での生活について 27
（1）中区を選んだ理由 27
（2）住みやすさ・住みにくさ 28
（3）区内でよく行くところ 32
（4）今後も中区に住み続けるか 35
４．行政サービスについて 37
（1）行政サービスの利用・満足度・要望 37
（2）国際交流ラウンジとの関わり 39
５．外国人が暮らしやすくなるために 42
第３章　調査からみえたこと（結果の整理） 45
１．調査結果にみる中区で暮らす外国人の姿 45
（1）語られたことの整理 45
（2）インタビュー協力者からの提案 46
（3）区内でよく行く場所マップ 49
２．中区の多文化共生推進に向けた課題から今後を展望する 50
（1）インタビューからみえたもの 50
（2）今後の方策 51
３．むすびに 54

第１章　調査概要

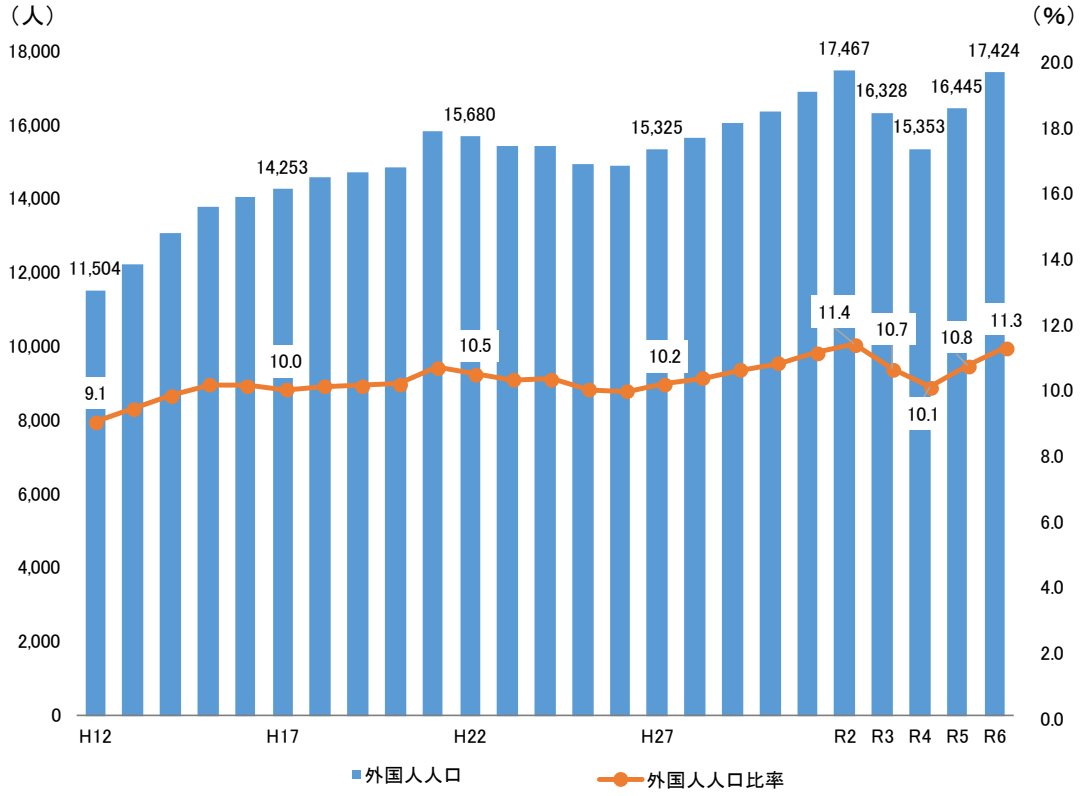
１．趣旨

（1）背景

①在住外国人の増加・多様化

・住民基本台帳によると、中区在住の外国人は、平成 12 年 3 月末には 11,504 人（総人口の 9.1%）であったが、令和 2 年 3 月末には 17,467 人（総人口の 11.4%）と、人数も総人口に占める比率も増加した。コロナ禍により一旦減少したが、再度増加に転じ、令和 6 年 3 月末には 17,424 人（総人口の 11.3%）となった。中区の外国人人口比率は市内 18 区 1 位であり、同時期における横浜市全体の外国人人口比率 3.1%を大きく上回っている。

■中区の外国人数の推移



資料：横浜市住民基本台帳人口（各年 3 月末）

・出身の国・地域別にみると、1 位の中国が 5 割を超え、2 位の韓国が 1 割超となっている。3 位以降は、平成 31 年には台湾、フィリピン、米国の順となっていたが、令和 6 年にはフィリピン、ネパール、台湾の順となっている。数年前と比べて、中国、韓国、台湾、米国、フランス等は減少し、ネパール、ベトナム等は大きく増加するなど、国・地域別の分布には変化がみられる。

■中区の外国人数の国・地域別推移

順位	国	H31（2019）年	
		人	%
	総数	16,892	100.0
1	中国	9,336	55.3
2	韓国	2,071	12.3
3	台湾	797	4.7
4	フィリピン	777	4.6
5	米 国	662	3.9
6	ベトナム	401	2.4
7	タイ	330	2.0
8	インド	318	1.9
9	ネパール	270	1.6
10	フランス	212	1.3
11	英国	203	1.2
12	ロシア	82	0.5
－	その他	1,433	8.5

順位	国	R6（2024）年		H31からの増減	
		人	%	人	%
	総数	17,424	100.0	532	3.1
1	中国	9,246	53.1	−90	−1.0
2	韓国	1,958	11.2	−113	−5.5
3	フィリピン	789	4.5	−8	−1.0
4	ネパール	773	4.4	503	186.3
5	台湾	734	4.2	−63	0.5
6	ベトナム	639	3.7	238	59.4
7	米 国	594	3.4	−68	−10.3
8	タイ	355	2.0	25	7.6
9	インド	336	1.9	18	5.7
10	英国	180	1.0	−23	−11.3
11	ロシア	111	0.6	29	35.4
12	フランス	95	0.5	−117	−55.2
－	その他	1,614	9.6	181	12.6

資料：横浜市住民基本台帳人口（各年 3 月末）

・在留資格別にみると、1 位の「永住者」が 3 割半を超え、2 位の「家族滞在」が約 1 割半となっている。3 位は、平成 31 年では「留学」、令和 6 年では「技術・人文知識・国際業務」となっている。

■中区の外国人数の在留資格別推移

順位	在留資格	H31（2019）年	
		人	%
	総数	17,041	100.0
1	永住者	5,939	34.9
2	家族滞在	2,862	16.8
3	留学	1,476	8.7
4	技術・人文知識・国際業務	1,397	8.2
5	特別永住者	1,097	6.4
6	定住者	966	5.7
7	技能	945	5.5
8	日本人の配偶者等	704	4.1
9	永住者の配偶者等	361	2.1
	その他	1,294	7.6

順位	在留資格	R6（2024）年		H31からの増減	
		人	%	人	%
	総数	17,383	100.0	342	2.0
1	永住者	6,427	37.0	488	8.2
2	家族滞在	2,506	14.4	−356	−12.4
3	技術・人文知識・国際業務	1,829	10.5	432	30.9
4	留学	1,311	7.5	−165	−11.2
5	特別永住者	975	5.6	−122	−11.1
6	定住者	956	5.5	−10	−1.0
7	技能	850	4.9	−95	−10.1
8	日本人の配偶者等	629	3.6	−75	−10.7
9	永住者の配偶者等	365	2.1	4	1.1
	その他	1,535	8.8	241	18.6

資料：中区外国人基礎調査（住民基本台帳に基づく集計）、H31 は 4 月時点、R6 は 5 月時点

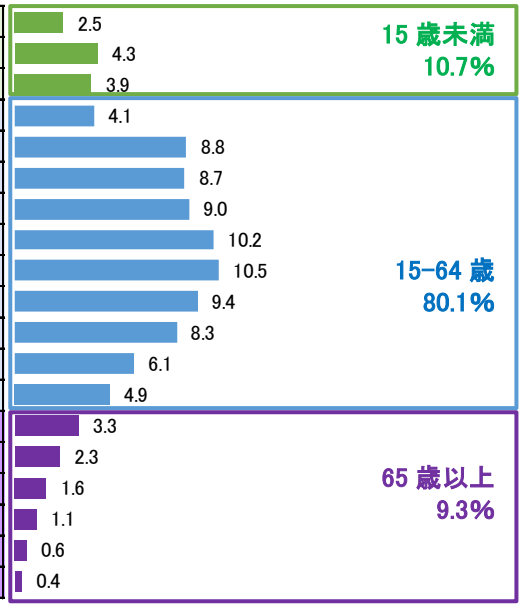
・年齢別には、0～14 歳 10.7%、15～64 歳 80.1%、65 歳以上 9.3%と、生産年齢への集中度が高く、高齢化率が低い構成となっている。(令和 6 年 5 月時点)。

【参考】同年の中区総人口（日本人を含む）の年齢別人口割合は、15 歳未満 9.4%、15-64 歳 67.0%、65 歳以上 23.7%（3 月 31 日現在）

資料：横浜市年齢別人口（住民基本台帳による）令和３年３月末日

■中区の年齢別外国人数（構成比）

（歳）	（人）	（%）
0-4	434	2.5
5-9	739	4.3
10-14	684	3.9
15-19	706	4.1
20-24	1,538	8.8
25-29	1,521	8.7
30-34	1,559	9.0
35-39	1,778	10.2
40-44	1,826	10.5
45-49	1,632	9.4
50-54	1,446	8.3
55-59	1,065	6.1
60-64	845	4.9
65-69	568	3.3
70-74	404	2.3
75-79	280	1.6
80-84	192	1.1
85-89	104	0.6
90歳以上	62	0.4
総計	17,383	



＊小数点第二位を四捨五入しているため百分率の和は 100.0%にならない。
資料：中区外国人基礎調査（住民基本台帳に基づく集計）令和 6 年 5 月時点

②社会情勢の変化

・以上のような傾向は、専門的・技術的分野の外国人の受入れ、高度人材の受入れと定着を積極的に推進するという国の方針、これに基づく最近の入管法の改正を反映したものである。専門性の高い人材が求めるライフスタイルは、地域の文化、環境と呼応し、多文化共生社会の進化、深化を促していく可能性がある。

・ロシア・ウクライナ情勢、中東情勢等の厳しい国際状況、不確実性の高い世界経済のもと、難民の受入れや、よりよい条件を求めて流動する人々の出入を受け入れる機会は、ますます増えつつある。コロナ禍に続き、円安環境が外国人の訪日を促す一方で、物価高が外国人の定住を困難にしている面もある。

・翻訳アプリやＡＩの活用の進展は、言語の壁を越えたコミュニケーションの可能性を拓き、多文化共生の地域づくりにおいても、追い風となりつつある。

（2）調査の目的

中区は、国籍やルーツによらず誰もが安心していきいきと暮らせるまちを目指し、2017 年に「中区多文化共生推進アクションプラン（アクションプラン）」を策定し、多文化共生施策を推進している。

現在は第２期（2021 年～2024 年）に入り、これまでの取り組みを継続・拡充していくと共に、定住層を視野に「地域とのつながりづくり」を重点に事業を推進している。

本調査は区内の在住外国人の生活について、さまざまな角度からヒアリングをすることで、第２期に見えてきた課題と取り組みの振り返りを行い、次期アクションプラン策定に生かすことを目的とした。

２．調査の実施概要

●調査方法：個別インタビュー

●調査対象：区内在住の外国人又は外国にルーツを持つ住民 20 人程度
対象者の抽出には、国籍別の人口比率を反映し、中国 5 人、韓国、台湾、フィリピン、ベトナム、ネパール、米国各 2 人、タイ、インド、英国各 1 人とした。

●調査項目：・プロフィール（出身／居住地区／在留資格等）
・ライフスタイル（家族／仕事／日本語の習熟度と日本語学習／コミュニティ、情報収集と困りごとの相談等）
・中区について（中区の選択理由／住みやすさ／区内での生活行動／行政サービスの利用状況）
・外国人が暮らしやすくなるための提案等

●実施方法：・国際交流ラウンジ利用者およびその紹介者を中心に、区内居住地、性別・年齢、在留資格、家族構成等に偏りがないよう配慮して対象を抽出し、日程調整できた方に対して実施した。実施に際しては、必要に応じて通訳を配置した。

●調査期間：2024 年 6 月～10 月

●調査結果：20 件 23 人から協力を得た。実施状況は次のとおりである。

実施順	実施日	出身の国･地域	属性
1	2024 年　6 月 11 日	米国	50 代男性
2	6 月 11 日	インド	60 代女性
3	6 月 25 日	台湾	40 代女性
4	6 月 28 日	ネパール	30 代男性
5	6 月 28 日	タイ	40 代男性
6	7 月 04 日	中国	30 代夫妻
7	7 月 17 日	中国	30 代女性
8	7 月 24 日	中国	20 代女性
9	7 月 24 日	ベトナム	30 代女性・10 代男性
10	9 月 03 日	中国	20 代女性
11	9 月 10 日	ネパール	30 代女性
12	9 月 25 日	台湾	60 代女性
13	10 月 07 日	ベトナム	30 代夫妻
14	10 月 08 日	英国	60 代男性
15	10 月 16 日	米国	20 代男性
16	10 月 23 日	中国	40 代女性
17	10 月 24 日	フィリピン	30 代女性
18	10 月 30 日	韓国	60 代女性
19	11 月 06 日	韓国	60 代男性
20	11 月 15 日	フィリピン	30 代男性

※「第 2 章 調査の結果」では、個人が特定されないよう、出身の国籍を、東アジア、東南アジア、南アジア、欧米の 4 つの地域に区分して語られたことを要約して掲載した。

第２章　調査の結果

１．インタビュー協力者のプロフィール

20 件のインタビュー協力者の出身国・地域、性別・年齢は、前ページのとおりである。20 件には、夫婦 2 組、男女 1 組のケースを含み、年齢は、30～40 代が 13 人、50～60 代が 6 人、10～20 代が 4 人となっている。

在留資格は、永住権 8 人、就労系 7 人、家族滞在 6 人、留学 1 人、日本国籍（帰化）1 人となっており、区内に在住する外国人の属性の多様性が反映されている。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20 代女性①	・家族全員永住権
	20 代女性②	・父は技能ビザ。永住権を取りたいと考えているが、取得は難しくなっている。 ・私たちは家族滞在。私は就職により就労ビザ（技人国）になる。 ・姉は結婚して転籍、もうひとりの姉は大卒後アルバイトとして働き、今年就職が決まって就労ビザを申請中。
	30 代夫妻	・夫は技術者資格、妻は家族滞在
	30 代女性	・家族滞在。夫は高度人材。現在、永住資格を申請している。
	40 代女性①	・文化活動ビザ。研究ビザの申請を勧められている。
	40 代女性②	・永住権。娘は日本国籍。
	60 代男性	・永住権。
	60 代女性①	・永住権。日本で生まれた子どもたちは特別永住権。
	60 代女性①	・永住権。息子も永住権。帰化はしない。一時帰国する時観光ビザになるのと、母国に財産もあるため、国籍は変えない。
東南アジア	30 代女性	・教育ビザ
	30 代男性	・就労ビザ
	30 代女性 10 代男性	・女性：特定技能 1 号 ・男性：留学生
	30 代夫妻	・夫：永住権。 ・妻：家族滞在。永住権を申請したが、まだ通っていない。
	40 代男性	・宗教ビザ
南アジア	30 代女性	・家族滞在
	30 代男性	・4 年前に帰化した。妻と子どもは永住権。 ・時々帰りたくなるが、それよりビジネスがしたいと思った。妻も私の母国に行きたくない。同胞は、父母の財産を子で分けるため帰化しない人が多いが、自分はあまりそう考えていない。子どもを日本で育てたいということもある。私の国と妻の国の間に日本がある。
	60 代女性	・家族全員永住権
欧米	20 代男性	・特別文化活動。1 年のビザだが、先輩によると延長できそう。
	50 代男性	・家族滞在
	60 代男性	・永住権、世帯主。通常は日本人の妻が世帯主になるが、外国人の夫として世帯主になった第一号。

２．生活・仕事・コミュニティ

（1）来日の経緯と中区への居住歴

「最初に親が来た」「結婚して来た」など、家族の都合に合わせて来日した人が多い。また、「日本が好きになって」「日本で働きたくて」自ら日本を選んで来た人も少なくない。

中区には、職場がある、身内が住んでいるなど、来日当初から住んでいる人が多い。来日後、他の地域で暮らし、中区に転居してきた人とともに、区内で転居して、中区に住み続けている人が少なくない。

地域	属性	語られた内容
東アジア	20代女性①	・最初に母が来日し、私はその 5～6 年後、中学生の時に来日して今年で 11 年目。最初から中区に住んでいる。
	20代女性②	・小学生の時、父が就労ビザで横浜（他区）に来て、翌年から夏休みには母、2 人の姉と遊びに来た。毎年来日したのは慣らしだったかもしれない。小学校を卒業して母やきょうだいと来日し、家族で住むようになった。 ・その後父が家を買って現住地に転居し、以来 10 年近く中区に住んでいる。
	30 代夫妻	・夫の仕事。今年 3 月に来日して現在 3 か月。日本には観光で何度も来たことがあるが、長期滞在は初めて。
	30 代女性	・夫の仕事で来た。10 年ほど前、1 年間県内他市で暮らしたことがあり、日本は自分たちに合っていると感じた、子どもの教育環境も合っている。 ・再度の来日で中区に住み、現在 3 年半。夫が、日本で正社員としてずっと働くための面接に合格して来日できた。
	40代女性①	・日本には、大学生の時学校のプログラムで来日。その後も観光で来た。 ・数年前、アーティストとして区内のアートイベントに参加した。母国の在住都市とアーティストを交換しており、応募した。 ・昨年、区内での芸術活動を企画することになり、この町に移住した。多文化比較を研究している。日本が距離的にも旅費等の経済的にも一番よく、アートイベントで縁のあったこの町を選んだ。
	40代女性②	・結婚して来日。当初は夫が暮らしていた県内他市のアパートに半年いた。結婚により家を探し、市内のマンションを買って転居、子どもが生まれ、子育てをしながら 10 年住んだ。しかし、日本の気候を知らず、換気をしなかったらカビて、リフォームをしたいと考えたところ、夫が転居を提案した。 ・区内のマンションに転居して十数年経つ。前住地に近い、便利なところで探し、条件が合うのが現在のところだった。
	60 代男性	・20 代で来日してからずっと中区に住んでいる。姉が区内で店を経営しており、手伝いながら学ぶために来た。日本語学校にも行った。 ・一度区内で転居したことはあるが、今も来日当初から住んでいる町で暮らしている。中区から出て暮らしたことはない。
	60代女性①	・日本の教育を受けた父から聞いて日本にあこがれた。カレンダーの写真に見る日本の景色は先進的だと思った。家は貧しくて進学はせず、日本企業に就職した。レストランでも働いていた。中華街なら仕事があるだろうと来日。 ・知り合いのつてで日本に来て 30 年以上、ずっと中区住んでいる。区内で転居し、現在は商店街のマンションに住んでいる。 ・最初は観光ビザ、就職して就労ビザになった。経済的な余裕を求め、友だちの誘いでカラオケ店を経営した。そして夫と出会い、結婚して生活してきた。 ・母国には日本統治時代の文化や習慣がまだ少し残っている。義理と人情にかたい国と思った。日本人は繊細でやさしい。真面目で責任感もある。

	60代女性②	・1970年代、留学中の夫に伴い来日。夫は日本語コースがある都内の大学に留学した。私は大学を卒業した年の春に結婚、夏にビザを取得した。日本生まれの同胞が多い中で、ニューカマーとして夫婦で来日したケースは、当時まれだった。 ・差別を心配したが、母が大丈夫と言った。言葉は、わからない時は英語を使えばよいと。縁があり、日本のことをよく言っていた。 ・夫は、日本の文部省の奨学生として来日し、横浜でアルバイトをしながら学んだ。夫が博士号を取ったら帰国する予定だったが、子どもが生まれ、大学に残り、その後も日本で働いた。 ・来日してからずっと中区に住み続けている。商店街に長年住み、現在は郊外のマンションに住んでいる。
東南アジア	30代男性	・日本に住むおばから話を聞いていて、子どもの頃から日本に来たかった。おばを頼って8年前に来日、日本語学校で学んで就職。ずっと区内でおば家族と同居している。
	30代女性	・仕事のため来日して3年目。区内で1度転居した。
	30代女性 10代男性	・女性：日本の文化が好きになって、4年前、留学生として来日した。区内の日本語学校で学んだ後、就職。当初から中区に住んでいる。最初は寮、現在は学校の紹介によるアパート。 ・男性：今年の4月に来日、区内の日本語学校で学んでいる。住まいは寮。
	30代夫妻	・夫：父が仕事で先に来日し、小学校入学前に自分と母が来た。以来ずっと区内に住んでいる。 ・妻：結婚して来日した。
	40代男性	・布教と同胞のために何かできればと来日して約5年。もともと同胞が多く住む町で、日本でも功徳を積みたいというニーズがあり、僧侶が呼ばれた。
南アジア	30代女性	・夫は数年前に来日、区内のレストランで働いている。私は結婚して半年前に来日。夫と区内の住宅地に住んでいる。
	30代男性	・留学で来日。内戦があり、若者は高校を卒業すると海外に出ることが多かった。内戦は終わったが、自分も出た。母国で日本の日本語学校の説明会があり、留学生として1年学んだ後、県内のビジネス専門学校に入学した。 ・卒業後、東京の自動車販売会社に就職し、その後、区内の同業他社に転職した。その時からずっと中区に住んでいる。当初は寮、その会社を辞めてからも同じ町に住み続けている。
	60代女性	・20数年前、夫（エンジニア）が日本企業に就職して、他県に家族で暮らしたことがある。数年後に帰国して夫は母国でリタイアした。その後、横浜の企業からオファーがあって再来日したが、その時は母国に夫の母がいて、私は母国と日本を行ったり来たりした。その後は夫と母国で暮らしていた。 ・昨年、夫に同じ横浜の企業からオファーがあって再び来日。数か月区内のウィークリーマンションで暮らした後、現在のマンションに移った。
欧米	20代男性	・故郷の都市は異文化を背景とする人が多く、多文化共生の概念がある街。大学で多言語・多民族社会の研究をしてきた。言語と文化は不可分。日本は国民の誇りとして多文化共生政策を進めている。日本社会と多文化共生を検証したくなった。 ・初来日は去年、日本の大学の日本語プログラムで2か月間学んだ。帰国して勉強を続け、多文化共生社会で博士課程の研究論文を書くことになった。その一環で市内の大学院に3か月前にきて、区内のアパートに住んでいる。
	50代男性	・妻の仕事の関係で来日して中区に住み、4年目。
	60代男性	・20代の頃ホリデー先で日本人家族と出会って行き来し、日本が好きになった。翌年、区内の学校の教師として来日。住まい探しは大変で、3週間探した。狭

		いアパートだったが、隣人はとても親切だった。 ・2 年後、結婚して区外に転居。2 人の子どもが生まれ、家を持とうとしたがローンが組めず、貯金をして区内に土地を買った。数年度、そこにマイホームを建て、今も住み続けている。

（2）現在の暮らし方

自分の代で来日した単身者が 8 人（うち同僚と同居が 3 人）、夫婦または自分と子どもで暮らしているケースが 6 件、夫婦ふたり暮らしが 3 件となっている。先に来日した親または親世代と暮らすケースは 4 件で、うち 1 件は、結婚して 3 世代で暮らしている。住まいは、持ち家が多い。

同胞同士の家族、同居が多いが、配偶者が日本人というケースや、配偶者と離婚、別居、死別したケースもみられる。子どもが独立して、海外や市外に住んでいるという人も多い。

母国にいる父母や親戚がいて、行き来している人が多い。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20 代女性①	・分譲マンションに父母・きょうだいと同居。母国に親戚がたくさんいる。今も祖父母の様子を見に行ったり、母国で勉強するため、時々帰国している。
	20 代女性②	・父母ときょうだいと暮らしている。きょうだいのひとりは結婚して家を出た。
	30 代夫妻	・夫婦ふたり暮らし
	30 代女性	・夫婦と子どもの 4 人暮らし。地元の小学校に通う子どもは（3 年半前に来日して）最初は日本語がわからずに泣いていたが、今は不自由がない。同胞の友だちとも日本語で話している。日本で生まれた下の子は幼稚園に行く予定。
	40 代女性①	・アーティスト向け住宅でひとり暮らし。母国に父母と夫、きょうだいが海外にいる。夫は、休暇に来日するなど、行き来している。
	40 代女性②	・夫婦と子ども（大学生）の 3 人暮らし。
	60 代男性	・妻（同胞）とは十数年前に別れ、今はひとり暮らし。 ・20 代の娘は、就職して、現在東京在住。
	60 代女性①	・日本人の夫と死別し、現在はひとり暮らし。夫は、最近病気で亡くなった。2 人で働いてきて、これから老後の生活を楽しもうという時だった。 ・最初は友人宅に同居し、経済が安定してから母国に残して来た子どもを呼んだ。息子は日本の学校に行かせて社会人になり、市内に住んでいる。 ・母国にきょうだいがおり、日本と母国で半年ぐらいずつ暮らしている。
	60 代女性②	・現在は息子とふたり暮らし。夫は母国でも会社を経営しており、離れて住んでいる。中途障害者となった息子のリハビリのため、現在のマンションにふたりで転居した。 ・娘は、同胞と結婚して、現在他県在住。海外在住の弟と、親戚が母国にいる。
東南アジア	30 代男性	・来日しておば一家と同居してきた。いとこは日本で生まれて、日本語がペラペラ。歳が近いいとこに助けられたが、現在は結婚して他県で暮らしている。 ・母国に父母ときょうだいいる。
	30 代女性	・ひとり暮らし。母国に父母、弟が海外に住んでいる。
	30 代女性 10 代男性	・女性：現在は、区内のアパートでルームメイトと暮らしている。 ・男性：日本語学校の寮で生活している。 ・母国で、２人は近所に住んでいた（年長者が年少者をサポートしている）。
	30 代夫妻	・夫婦、子ども、夫の父母の 5 人暮らし。住まいは、現在は持ち家。 ・母国とは、行き来している。これからも行き来したい。

	40 代男性	・単身赴任。故郷に父母がいる。時々帰る。
南アジア	30 代女性	・夫婦ふたり暮らし。
	30 代男性	・夫婦と子どもの 4 人暮らし。妻は他国籍。社会人になった子どもと保育園児がいる。父母と祖母が母国に住んでいる。
	60 代女性	・夫婦とこどもの 3 人暮らし。娘は海外で就職したが、私たちが日本にいるので転職し、東京で専門を活かして働いている。息子は母国の大学を卒業し、エンジニアとして母国で就職準備中。
欧米	20 代男性	・ひとり暮らし。母国に父母ときょうだいがいる。
	50 代男性	・夫婦と子どもの 3 人暮らし。
	60 代男性	・日本人の妻とふたり暮らし。2 人の子どもは、母国で働いている。

（3）仕事

現在の就業状況は、会社員 5 人（IT 系企業、介護施設、製造業）、個人事業主 4 人（宗教者、アーティストを含む）、経営者 3 人、学生 3 人（大学院生 2 人、留学生）、主婦 5 人、リタイアメント 2 人となっている。

日本で働くことを希望して、自国で培った専門性を活かして、赴任、転職してきた人が少なくない。留学生として来日した人の中には、ビジネスを起こした人や、自国で培った専門性を活かした職につくことができず、次のチャンスを拓くために努力している人がいる。

日本に赴任した夫に伴って来て現在は専業主婦でも、就職を希望している人が多い。ハローワークを活用している人は少なく、同胞のネットワークで探しても希望する仕事がない、また、どんな職に就けるか、必要な情報にもたどりついていないという状況もみられる。

日本で育って教育を受けても、外国人であるという理由で就職に不利があることも語られている。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20 代女性①	・個人事業主として、イベントなどの装飾をしている。日本の大学で学んで専門を活かした会社に就職したが、体力的に難しく、今の仕事を学んだ。客は中国人をはじめ、中国語圏の人が多いが、日本人の客も増やしたい。現在日本で関連資格を取るために学んでいる。将来は東京に店を持ちたい。
	20 代女性②	・大学院生。海外で博士号を取りたかったが、ビザのことと、大学の教員は少子化で学生数が減って教員の席が空きにくいため、難しいと思った。 ・横浜で就職が内定している。第一志望は、外国人の採用は叶わなかった。就活はラウンジの先輩がアドバイスしてくれた。大学のキャリアセンター、就活セミナーは利用しなかった。 ・アルバイトは高校生のときからしている。現在もコンビニと、土曜日は他区ラウンジの窓口スタッフとして働いている。就職するまで続ける。
	30 代夫妻	・夫：日本企業で IT の仕事をしている。会社は都内。（大学卒業後）母国で 13 年間 IT 技術者として働いてきた。 ・妻：現在は主婦。求職中である。大学を卒業して母国と海外で幼児教育の仕事をした。家族ビザになって就労可能となりハローワークに行ったところ、子どもの教育関係の仕事を紹介され、日本語の履歴書を作成中である。
	30 代女性	・自分は主婦。夫は IT エンジニア。来日時はコロナで在宅勤務が多かったが、現在は週 2～3 日出勤している。
	40 代女性①	・アーティスト。自然の生態環境や文化形態、様々な出来事を反映する食卓を写真に撮り、多文化の視点で見つめる。母国の大学では商品デザインを学んだ。

東アジア	40 代女性②	・母語支援ボランティア、市民通訳ボランティア。日本人の夫は、技術系の会社員。
	60 代男性	・飲食店を経営。市内に複数出店している。本店は区内。 ・当初は姉の会社に勤務していたが、経営体制が変わって離れた。横浜は狭く横のつながりがある。好奇心があり、仕事が好きだったことから「何かしないと」と自ら仕事を探した。日本語学校の同僚が経営するレストランで 3 か月学び、1 年ほど準備をして開店した。
	60 代女性①	・パートで働いていたが、コロナもあって辞めた。現在は無職。教会に行ったり、教会のボランティアをしたり、ピアノを習っている程度。
	60 代女性②	・区内で飲食店を経営。イベントのボランティアで母国の料理を出したところ、母国の食文化を提供する店を出すことを勧められて区内で開店し、30 年近くになる。すべて手作りの家庭料理。客は日本人も多く、親子 3 代で通う客もいる。外国人観光客も訪れ、多文化交流の場となっている。
東南アジア	30 代男性	・市内の高齢者福祉施設に勤務している。おばの友だちから紹介され、日本語を学びながらアルバイトで介護補助として働き、卒業後そのまま就職した。介護福祉士の資格がないと正社員では働けず、事務スタッフとして採用され、現在は、通所サービスの事務を任されている。 ・母国では大学で看護学を学び、看護師として就職したが、日本のコンビニバイトより低収入だった。日本でも介護福祉士等の資格を取りたいが、実家に仕送りするためまだ準備できない。今の仕事を続けながらオンラインビジネスも行いたい。そのため、SNS 等で情報収集をしている。
	30 代女性	・学校カウンセラーで心理学の専門職。市内の外国人学校で、高校生に大学進学のためのカウンセリングを行っている。平日 5 日間のフルタイム勤務。 ・海外で同種の仕事をしていたところ、現在の学校がカウンセラーと教員の両方できる人を募集し、応募した。
	30 代女性 10 代男性	・女性：都内の高齢者施設の厨房で働いている。今年正社員になれた。勤務はシフト制で、時間は早番・遅番・夜間、休日は月 4 日で、曜日はバラバラ。仕事は SNS（同胞コミュニティ）のクチコミを頼りに探した。横浜で就職したかったが、職がなかった。母国では大学で経済を専攻し、専門を生かした仕事をしていた。現在自活はしているが、親への仕送りはまだできていない。 ・男性：日本語学校の学生。飲食店でアルバイトしている。先輩の紹介。卒業後は、日本の大学で自動車関係の技術を学び、エンジニアになりたい。
	30 代夫妻	・夫：会社員（製造業）。本社は都内で、そこに通っていたが、現在は市内の事業所勤務。自分の他に外国人はいない。 ・妻：主婦。
	40 代男性	・区内で僧侶として、区内の宗教関係施設にいる。僧侶は、最初は自分 1 人、途中で 1 人ずつ増えて現在は 3 人。また増える予定である。
南アジア	30 代女性	・仕事はしていない。夫の店を手伝ったこともあるが、現在は手伝っていない。 ・母国では（結婚前）事務系の仕事をしていた。 ・英語でできる仕事の情報もどこにあるかわからない。ハローワークは使っていない。インターネットで応募して、簡単な日本語がわかればよいとあっても、求める日本語のレベルは思っているより高い。どんな仕事ができるか、したいかは　まだわからない（日本語を勉強しながら見極めたい）。

南アジア	30 代男性	・経営者。自動車販売会社への勤務、日本人の友だちと立ち上げた店の経営を経て、5 年前に独立。アジア食材の販売を経て、現在は区内でバーを経営している。客は日本人と外国人が半々で、同胞はあまりいない。 ・また、母国で人材派遣、留学支援を事業化した。日本語学校の管理は母国で父親が行い、自分もオンラインで面接を教えたり、経営のため日本と母国を行き来している。留学で来ると日本語学校に入るが、就労ビザで来ると日本語を学ぶ機会はない。就労ビザは、技人国で企業に就職するか、特定技能でレストランや介護施設で働くか。母国で取れる特定技能資格は、宿泊、建設、介護、外食、農業の 5 分野。日本語のほかに該当分野の試験もある。試験分野の多い国へ行って受験する人もいる。留学で、20 歳近くで日本に来て「大学進学や専門に目標はないが、日本で仕事をしたい」という人も少なくないことから、仕事で入るルートを拓くことにした。
	60 代女性	・専業主婦。最初の来日時は住んでいた都市で英語を教えていた。
欧米	20 代男性	・母国の大学院に所属。現在は区内の大学院で多文化共生研究に集中しており、仕事は検討中。
	50 代男性	・ビジネスコンサルタント。クライアントは母国にいる。ミーティングはオンラインで行っている。日本絡みの仕事はない。
	60 代男性	・リタイアメント。区内の学校に教師として就職し、後半は校長を務めた。

（4）子育て・子どもの教育

日本で生きていくため、子どもは地元の学校に通わせるという考え方と、国際的に活躍できるよう、外国人学校に進学させるという考え方がみられる。区内には、外国につながる子どもが多く通う小中学校や、外国人学校、英語で幼児教育が受けられる場などがあり、それぞれの考え方によって選択している状況がみられる。

区内の学校には子育てに入る時から、子どもの日本人の友だち、自分のママ友をつくろうと努力した人もいる。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20 代女性①	・区内の中学校から東京の高校、大学へと進んだ。父は日本語が大丈夫だが、母は少ししかできない。学校からの便りがわからない時は、自分で単語をネットで調べたり、友だちや先生が教えてくれた。妹は中学生、弟は小学生になった時来日した。弟は日本語がペラペラで、母国語がわからないことがあり、家では家族が母国語で話している。弟は日本の進学塾と母国語の塾に通っている。
	20 代女性②	・親から急に「日本に住むことになった」と言われて来日した。最初は抵抗感があった。市内の小学校から中学校に進んだ。母国では小 3 から学校で英語を学んでいて、英語の授業は、他の教科より楽だった。高校受験は、日本人と同じ試験問題を少し長めの時間をかけて解いてもよいという配慮があった。市内の高校の国際学科から東京の大学に進学した。 ・上の姉は高校を卒業してから来日し、日本語学校に入学したが、日本語がわからずに大学進学を断念した。幼いうちに来たほうが早く慣れると思う。
	30 代夫妻	・子どもが生まれたら、日本で教育を受けさせたい。
	30 代女性	・1 人目の子どもは母国で産んで家族みんなで育てたが、2 人目は日本で産んだ。夫は仕事。孤軍奮闘は怖かったが、看護師さんが察してきめ細かくサポートしてくれた。そんな経験を通じて母親になれた。自分でも感動した経験だった。

		・保育園ではやさしい日本語で話してくれる。学校の先生は、時間がある時はやさしい日本語で話してくれるが、緊急時で通訳がない時は子どものことがわからないのではと不安。進学塾では先生が忙しく、やさしい日本語に力をいれていないため、子どもの状況を知ることが難しい。
東アジア	40 代女性	・娘が生まれて、娘の友だち、自分のママ友をつくろうと、いろいろな公園にでかけた。当初は友だちになるのに時間がかかり、夫が地区センターにプレイルームがあることを調べてくれた。外国人には情報がわからず、発想もなかった。 ・娘の幼稚園を選ぶきっかけも日本人のママ友。同胞の先輩ママは中華街の幼稚園を選んだが、日本で生きていくためにはと考え、日本の幼稚園を選んだ。 ・小学校も「ひとりっ子ならこういう学校もいいかも」という幼稚園のママ友の言葉から選んだ。小中学校では PTA 活動をした。大変だったが、日本人からアドバイスを得てきた感謝もあり、引き受けた。
	60 代男性	・家庭では母国を使い、娘は幼稚園に入ったとき、日本語での表現が不十分で、もう少し自信を持てるといいと思った。参観日に自己紹介で、敢えて大きな声で自分が父親で外国人であると言った。保護者はほとんど日本人。まだ外国人差別のある時代だったが、娘は少しずつ自信を持てるようになった。自分が自信を持って自己紹介したことが役に立ったと思う。 ・娘には日本の教育を受けさせたくて、地元の小中学校に通わせた。学校には外国につながる子が多く、娘も外国人の友だちと親しくしていた。学校からの便りは自分も見たが、妻が勉強して自分より理解できるようになり、学校の対応に苦労はなかった。妻は教育熱心で、留学もさせた。現在、娘は、日本語、母国語、英語が使える。母国語は、自宅で妻が教え、週 1 回塾にも通った。 ・娘は、考え方が日本人。日本人になじみ、寂しい思いもせず、よかったと思う。私も 20 代で日本に来て、3 年ぐらいは大変だったが、慣れてきたら日本のほうが合っていると思った。娘にも慣れてほしかった。
	60 代女性	・息子（父親は同胞）は、高校まで母国にいて、留学で来日、日本語学校から専門学校、会社勤めを経て起業し、今は会社を経営している。
	60 代女性	・長男は、夫の会社を継ぐ予定で国際的な環境がよく、外国系の幼稚園に通わせた。地元の小中学校は、外国につながる子どもが多く、お弁当もいろいろだった。都内の外国人学校から母国の大学に進んだが、なじめずに戻って来た。 ・娘は、会社を継ぐ立場にはなく、市内の私立学校に通った。同胞も多いと聞いて通わせた。日本名を名乗る子が多かったが、娘は自分の姓で通った。母国の大学から海外留学し、日本に戻った後、大使館に数年務めて結婚した。
東南アジア・南アジア	30 代夫妻	・娘も自分と同じ地元の小学校に通っている。絵本は日本語で読んであげた。学校の音読の練習は一緒に聞いてあげる。娘には、日本語、母国語、英語が使えるようになってほしい。母国語の読み書きは、家で母親（妻）が教えている。
	30 代男性	・2 人の子どもには障害があり、それぞれサポートを受けている。上の子は市内の特別支援学校を卒業して、現在は区内の就労支援施設に通っている。 ・下の子は保育園に通っている。保育園では少し日本語を使うが、あまり話せない。自宅では英語で話し、母国語は話せない。 ・子どもを外国人学校や私立の学校に入れる同胞もいるが、自分はせっかく日本にいるからには地元の学校でと考えている。日本の教育システム、学校はよい。 ・同胞から教育についての相談が入る。日本の学校の制度や費用を心配している。情報が少ないと思う。今は翻訳アプリもあるが、大切なことを翻訳してパンフレットにすることも大事と思う。例えば、入学時前に、受験のことも含め 1 回セミナーがあるとよい。通訳が入って教育システムを案内するなど。来日前のオリエンテーションが大事と思う。

	60 代女性	・2 人の子どもは、最初の来日時に生まれ（出産は母国）、10 歳と 7 歳まで日本で育った。子どもたちは、帰国後祖父母と話せるよう、外国人学校に通わせた。息子は日本の塾にも通わせ、今も少し日本語ができる。娘は、日本の保育園に通わせたが、7 歳で帰国し、今は日本語を忘れている。 ・日本人の子どもとは公園などで遊んだ。
欧米	50 代男性	・娘は来日後、保育園に通い、3 歳になって現在通っている幼稚園に移った。保育園は英語で教える幼児教育の場で、日本人の子どももいた。幼稚園は日本人が通う施設である。
	60 代男性	・娘たちは外国人学校に通っていた。 ・母国と日本の公立学校との教育システム、文化、習慣の違いを感じている。ひとつには、クラスの人数が多い。また、日本の教育は、自分で考える、批判（判断）する、創造するというより、まだ、教え込む、憶えさせることに重点を置いていると感じる。子どもの意志、気持ちを優先する方向に進んでほしい。

（5）コミュニティ

同胞コミュニティは、身近にある人とない人、あっても参加していない人、積極的には参加していないがつながりを感じるなど、参加の仕方は様々である。教会や寺、母国の料理店が、つながりの拠り所となっている様子もみられる。区内には、歴史のある教会や国際的な社会貢献活動団体、外国人が多く参加する新たなアート活動エリアなどがあり、インタビュー協力者の中にも参加している人がみられる。

日本人とのつながりは、近所づきあいや友だちづきあいを積極的にしている人、近所づきあいはしていない、あいさつ程度など、幅がある。日本人は何を考えているかわかりにくい、マンションでは周りの人が冷たい、差別意識を感じることがあるとの声もある。一方で、横浜スタジアムやまちなかの店など、趣味を同じくする人同士で友だちになったという人もいる。

自治会・町内会に入っている人は極めて少なく、知っていても「誘われたことがない」と複数の人が語っている。地域に参加したいが、自治会・町内会のことは知らなかったという人もいる。一方で、町の活性化のために町内会でもっと積極的に活動したいという人もいる。

消防団、地域ケアプラザの花壇交流会など、地域でのボランティア活動に参加している人もいる。その場合、ラウンジが、それぞれの参加ニーズに応じて各種の地域活動情報を提供し、自ら自分に合う活動を選んで参加している。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20 代女性①	・自治会・町内会は聞いたことがあるが、行ったことはない。マンションの会議にも参加していない。マンションの住民（日本人が多い）とはエレベーターで会ったらあいさつをする程度。 ・同胞のネットワークはある。
	20 代女性②	・同胞ネットワークは、知り合いがいて心強い。同胞の友だちとばかり遊んでいると、日本人の友だちをつくろうと思わなくなる。結婚するなら同胞の人。日本人とは深いところで文化の違いがあると感じる。日本人はみんな一緒がいいが、私は、自分は自分と考えている。日本人は、返事が曖昧で意志がわかりにくい、本音と建て前もよくわからない。アイデンティティについては、中学生の時悩んだことがあったが、今はない。自分は母国人だと思っている。 ・住んでいるマンションでは交流がない。隣が誰かもわからない。同胞同士もコ

東アジア		ミュニケーションを取らない。 ・バイト先のコンビニや飲食店では、やさしい客もいるが、(外国人とわかると)嫌なことを言われることもある。名札を付けているし仕方ない。それでも、自分で乗り越えないと、日本でがんばれないと思った。
	30 代夫妻	・地元で近所付き合いをしたいと希望しているが、まだできていない。自治会・町内会のことは知らない。
	30 代女性	・同胞の住民はあまりいない。コミュニティもない。 ・自治会・町内会の存在は知っているが、賃貸マンションなので当番は回ってこない。マンションとして入っているかどうかもわからない。 ・日本人とは、向こうがどう思うかわからないからつながりにくい。同胞同士なら、どう返してくるのか予想がつくから距離感を気にしない。 ・地域ケアプラザの花植交流会に参加している。高齢者と接すること、日本語で話せることは楽しい。子育て以外にできることがたくさんあり、母親としてではなく自分として過ごせる時間が持てることは幸せ。
	40 代女性①	・自治会・町内会のことはわからないが、地域の NPO を介してつながっているのではないか。 ・月に 1 回の清掃活動に参加している。地域の祭りには是非参加したい。また、貢献もしたい。住まいは、NPO が紹介した一軒家。近所の住民との連絡は多い。アーティスト間でのプライベートなやりとりもある。横浜に来て、どの国の人もやさしくしてくれてよかった。
	40 代女性②	・同胞ネットワークには入っていない。市内に日本学校時代の友だちが何人かいて一緒にボランティアをしている。同郷人との付き合いはそれで満足。 ・前住区では自治会に入っていたが、今はないようだ。住まいは小さなマンションで、地域との関係はない。マンションではエレベーター等で会えば、あいさつするようにしている。
	60 代男性	・同胞団体の会員になって 2 年。たまにイベントに参加する程度。先代からの在住者が多く日本の考え方。ニューカマーへの理解は薄いと感じる。もっと視野を広げると利用できると思う。 ・居住地の町内会に入っていないが、店がある町では町内会ではもっと活動したいと考えている。ゴミ収集所の管理はしている。年間 12000 円の報酬をもらっているが、お金の問題ではない。 ・日本人の、ルールを順守する姿勢を尊敬している。会社の腹心は日本人。
	60 代女性①	・友だちは同胞系が多い。日本人との付き合いもある。 ・母国にいた時から教会に通っていた。信仰もあるが、人を愛すること、コミュニケーションのとり方など勉強になる。夫が亡くなった時は慰めになった。現在通っている教会には、外国人も日本人も通っている。 ・住まいでは、日本人との交流はある。マンションの管理組合の会合には夫が参加していた。今後は自分が参加しなければならない。町内会は、会費をマンションの管理組合経由で払っているが、出たことがない。誘われたこともない。
	60 代女性②	・同胞団体は大事なところ。イベントは民族衣装を着て集まる機会。自分の代で来た人も、2 代、3 代前からの在住者も立場を超えてつながれる。毎月のお知らせも母国を思い出す。大事な母国との縁を残してくれている。 ・以前の住居では家族のように住んでいたが、今は新興住宅地のマンションで近所付き合いはしていない。あいさつをしても、あいさつが返ってこないことがある。息子が倒れて救急車を呼ぶと、「またか」という反応もある。 ・日本人は表情に出さず、何を考えているかわからない。しかし、親しくなると見捨てない。

東南アジア	30 代男性	・日曜日に教会に通っている。同胞ネットワークがある。そこで友だちもできて、一緒に遊びに行ったりする。教会では母国語で話す。 ・母国料理の店に、同胞がよく集まる。 ・町内会のことは知らないが、マンションでは日本人との付き合いもある。共同浴場で住民同士、おしゃべりをする。
	30 代女性	・同胞コミュニティには入らない。教会にもあまり行かない。職場の同僚は欧米人が多く、日本人の友だちもいる。英語が話せる人。 ・区内の前住地では、居酒屋で知り合いを作ろうと試みた。そこで町内会のことも知った。自炊はせず、毎日外食しに行っていた。交流の場としてはよかった。野毛では、ゴミ拾いを一度手伝ったことがある。ポスターがあり、お隣に聞いてみたら、イベントの内容を教えてくれた。 ・日本語を覚えたくて「こんにちは」と声をかけるが、人によって反応は違う。
	30 代女性 10 代男性	・住んでいるところでは日本人との関わりはあまりない。自治会・町内会も知らない。職場は東南アジア出身者が数人いて。他は日本人。職場の日本人とは話す。相談は同胞の友だちにする。今の住まいには、前は同胞の学生だけ住んでいたが、今は別の国の人が多い。日本人はいない。
	30 代夫妻	・同胞コミュニティがあることは知っているが、参加していない。 ・町内会には入っていない。誘われたこともない。仕事をしていると参加は難しい。父母は日本語の問題から難しい。地域の祭りにはよく行く。娘が友だちに会いに行きたがる。 ・学校の PTA 活動もしていない。妻は、娘の幼稚園時代のママ友との付き合いが今もある。（日本語でのコミュニケーションには）夫が間に入る。
	40 代男性	・母国にはいろいろ宗教があり、同じ宗教・宗派内で助け合っている。 ・同胞はグループになっていてコミュニティがある。寺に来る人たちは、困った時は、寺やコミュニティを頼っている。病気のときも助け合う。市大病院に一緒に行って日本語を話せる人が通訳するなど。 ・日本人と結婚した同胞が、とてもよくサポートしてくれる。国際結婚している人は多い。外国人支援ボランティア団体も、寺に来てサポートしてくれる。日本語学習、書類の作成支援、事件があったときの対応など。 ・町内会、商店会等には、よくわからないが、入っていないかもしれない
南アジア	30 代女性	・同胞コミュニティには参加していない。 ・住まいの地域での日本人との付き合いは皆無。
	30 代男性	・県内在住の同胞コミュニティには、横浜在住者を中心に 400～500 人が参加している。年に 1 回ぐらい集まり、寿町のホームレスに食事を配るなどしている。能登地震の時も支援に行った。Facebook グループのほか、3 か月に 1 度、中心メンバーによるミーティングもある。
	60 代女性	・同胞コミュニティは、出身地や言語、宗教等により多数ある。娯楽や個人グループ等の SNS グループもある。私は友人と電話で連絡を取る。例えば、母国の料理に必要な食材をまとめ買いしてくれる友人がいて助かる。 ・日本が大好きだが、ここではコミュニケーションがないのが残念。日本人は優しいが、英語が 100%できないとコミュニケーションをとろうとしない。前住地では周りの日本人が優しくていろいろ教えてくれた。お互い辞書を持ってコミュニケーションした。阪神大震災の時、私と息子は娘の出産のため帰国していて、夫が独り日本にいた。近所の人に「水を溜めて」と言われて風呂に水を溜めたそうだ。子育て仲間と 7 人で 5～6 日過ごしたという。社宅ではなく団地だった。

欧米	20 代男性	・日本人とは、大家さん、アパートのつきあい、ベイスターズファン等と付き合いがある。カフェで出会った人との趣味を介した交流もある。横浜スタジアムに行ってベイスターズファンと友だちになった。母国の選手を応援してくれると嬉しい。その友だちは、試合情報等を SNS で送ってくれる。
	50 代男性	・ゲーム仲間とオール英語の交流をしている。 ・地域では消防団に入った。日本に長くいる予定であり、いる限りは日本の文化に触れ、いろいろな人と会いたい。日本語教室では学べなかった日本語をどうやって学ぶか。母国にも消防ボランティアがあり、自分の想いともマッチしていた。ラウンジスタッフから紹介された地域活動の中から、消防団を選んだ。入団して 1 年経った。日本語は大変だが、友だちもでき、楽しくやっている。毎週末、パトロール、装備の確認等を行う。 ・町内会には、マンションとしては入っているかもしれないが、個人としては入っていない。
	60 代男性	・区内にある外国人クラブは、会員数 1000 人規模で、今も大きくは減少していないのではないか。かつては外国人限定のステイタスのあるクラブだったが、現在はよりオープンになり、日本人も会員になっている。 ・区内の教会で牧師を補助している。また、横浜港で船員の陸上活動をサポートするボランティア活動をしている。本牧、大黒、山下ふ頭に着いた船員に、新聞や雑誌を届けたり、買い物、両替のサポートをしたり。中区に来てみなさんに支えられた。今度は自分が外国人を迎えてサポートしたいと考えた。 ・地域の町内会には入っていないが、お祭り等には参加している。 ・外国人差別はまだ少しあるかもしれない。住まいの確保をめぐる差別の例を 2 件ほど聞いている。人種、民族による差別、保証人がいないから貸さないなど。

（6）日本語の習熟度と日本語学習

日本語の習熟度には幅があり、インタビューに通訳者は不要としたケースは 12 件、通訳が同席したケースは 8 件であった。母国で日本語能力検定試験に合格していても、会話は難しいという状況もみられた。通訳者は同席せず、インタビューを受けた人同士で通訳をしているケースもあった。通訳を求めなかった人には、日本人と同じように会話ができる人も、やや不十分な人もみられた。日本人と同じように会話ができる人も、「カタカナは苦手」「ひらがなが続くと読みにくい」「病院でのやりとりは今も不安」と話した。

来日時は日本語がまったくできなかった人が多く、子どもの頃なら学校で学ぶが、大人になっていたら日本語学校で学ぶか、国際交流ラウンジや地域日本語教室で学ぶが、日本語学校は高額、ラウンジ教室は時間が合わないなど、もっと学びやすいとよいというニーズがみられる。日本語教室に加え、自らの必要に応じて、外国語学習サイトを利用している人もいる。「もっと漢字を学びたい」「子育てに必要な日本語を学びたい」「日本文化を知るため、丁寧語や敬語を学びたい」等、ニーズは個々に異なる。

やさしい日本語については、「来日時に対応してもらえると助かる」という声が複数あった一方、「表現をやさしくすることでニュアンスが変ってしまう」という声もあった。

多くが、家庭ではあまり日本語を使わず、学校や職場、地域でのコミュニケーションを通じて習熟してきたと語っている。日本で育った子どもが、日本語のほうが得意になり、母語を忘れてきているという話もあった。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20 代女性①	※インタビューは通訳なし。日本語に堪能。 ・来日した時はゼロ。中学の国際教室で毎日勉強したが、クラスには同じ国の人が多く日本人の友だちとはあまり交流がない上、日本語を話す機会が少なかった。日本語が身についたのは高校生の時。クラスに同胞は他に 1 人だけで、日本人の友だちができ、日本語で話した。
	20 代女性②	※インタビューは通訳なし。日本語に堪能。 ・来日時の日本語はゼロ。最初は勉強も何もわからなかった。小学校の国際教室で簡単な単語から習った。中学にも国際教室があったが、日本語をよく使う国語、社会以外は普通のクラスで勉強した。日本語は、学校に行っているうちに身についた。身につけようという意識はなく、周りが日本人で、聞いているうちに覚えた。今のように話せるようになったのは大学に入ってから。 ・同胞の友だちや家族とは母国語で話す。本は、日本語も母国語も読む。 ・母は飲食店で働いたことがあり、ある程度日本語が話せる。父は話せない。学校の連絡は、国際教室、国際交流ラウンジでみてもらった。父母のための通訳・翻訳は、大変と意識したことはなかったが、病院に行くときは通訳したことがある。今も「処方薬の副作用を読んで」などと頼まれることがある。
	30 代夫妻	※インタビューに通訳あり。 ・夫：母国で日本語を勉強してＮ３を取得した。来日後は仕事中心で勉強していない。職場は同胞が多く、あまり日本語を使わない、直属の上司も同国人で、日本語では話さない。妻と土曜日に地域日本語教室に通っている。マンガを日本語で読むのも勉強のため。日本語は大学の日本語クラスで学んだが、使ってこなかった。現在習いたいのは会話。 ・妻：毎日日本語教室に通っている。平日はラウンジ教室と地域日本語教室に通い、1 日に 2 か所行く日もある。
	30 代女性	※インタビューに通訳あり。 ・日本語にはあまり興味がなかったが、大学の授業で発音がきれいと感じた。漫画やアニメで面白くなったが、その後仕事で日本語を使う機会はなかった。 ・以前はラウンジの日本語教室に通い、今は地域日本語教室に週 1 回通っている。子育て中のため時間的に参加できない教室もある。夫もラウンジ教室に通っていた。時間調整もでき、宿題を一緒にするなど、自分たちの生活スタイルに合っており、中区の日本語教室には満足している。 ・会話ではやさしい日本語に期待している。区役所での説明で、漢字で最初の言葉を理解しても「～していただきませんか」と続くとわからなくなってしまう。シンプルに話してもらえると助かる。学校の先生はシンプルに話してくれる。敬語は不要、言葉での会話が成り立つことが大事。敬語はわかりにくく、「もう一度お願いします」と頼むこともある。 ・文字での表示は難しくない。生活の中で表示は見るようにしている。学校の手紙は、短い文章はキーワードでわかるが、長い文章は母国語の翻訳アプリを使って読むことがある。
	40 代女性①	※インタビューに通訳あり。ラウンジの日本語教室に通っている。 ・日本語は、まだプレッシャーがある。英語は大丈夫。30％ぐらいは日本語で大丈夫。普段は、下手な日本語でコミュニケーションを試みている。通じないときはアプリを使う。 ・今も日本語の勉強を続けている。帰宅後も勉強しなければと思っている。 ・「やさしい日本語」は、今の段階では必要。まだ赤ちゃんのように単語を使う段階。文法はまだわからず、わかるようになるとプレッシャーもなくなると思う。

東アジア	40 代女性②	※インタビューに通訳なし。 ・最初に日本語を学んだのは、20 歳の時。母国の日本語学校で学んだ。卒業後、学校長の紹介で、長期の公共事業に 2 年間派遣され、設備を購入した日本企業の技術者による現地での説明を通訳した。日本語学校卒業時はあいさつ程度だったが、現場では身振り手振りも入れてがんばって通訳をこなし、来日時には日本語を使うことができた。この業務で夫と出会った。 ・来日後は、妊娠して病院に行ったり、娘の乳幼児健診や予防接種、幼稚園や学校と、新しい局面ごとに必ず新しい単語が出てきて、夫に聞いたり、調べたりして身に着けた。学校の説明会に夫を連れて行ったこともある。学校からの便りは読めていた。病院でのやりとりには今でも不安があり、夫に伴ってもらう。 ・ママ友の紹介で始めた学校の母語支援では、来日して学校の生活に慣れず、表現できずにイライラしている子どもが、時間をかけて友だちができ、日本語に慣れ、学校生活が楽しくなっていく過程が見られる。母語支援は、小学校から中学までと関わりが長い。支援していた子が成長した姿を見るのはうれしい。 ・市民通訳としては、区役所への定期派遣通訳を務めたことがある。手続きに来る方々は様々な状況にある。困っている人の役に立てるのはうれしい。生活に困っている人の中には、何から何までわからない人がいる。手続きが終わっても頼られることがあると、ラウンジを紹介する。字を書けない人もいる。10 年間で 2 人いた。 ・多言語表記は、以前に比べて増え、表現もよくなってきた。外国人にはありがたく、親切心を感じる。
	60 代男性	※インタビューに通訳なし。日本語に堪能。 ・日本語はゼロで来日し、都内の日本語学校に 1 年半通った。最初は大変だった。学校やアルバイトに通う電車の中で単語をメモして覚えた。その後は独学。 ・その後、姉の店を手伝うため、専門学校で学んだ。入学には日本語が必要で勉強した。3 年ぐらいして日本語に不自由がなくなったと感じた。早い人は 1 年ぐらいでうまくなるが、自分は時間がかかった。妻は日本に来てから日本語を習い、読み書きは半年ほどでできるようになった。 ・店のスタッフは、アジア系の外国人と日本人。職場でのコミュニケーションは日本語。採用の面接では、日本語が共通語、なるべく早めに慣れるようにと伝える。皆、すぐ慣れる。アルバイトはほとんどが留学生。
	60 代女性①	※インタビューに通訳なし。日本語に堪能。 ・父が日本の教育を受け、日本語の本を読んでいた。父の影響で日本にあこがれ、日本の企業に就職した。会社で日本語、英語などの外国語を学べ、日本語を選んだ。よって、来日時には少し日本語ができた。 ・来日後、日本語の上達のためラウンジで勉強した。友だちのなかでも、日本語を勉強する人、勉強しない人と様々だが、言葉が通じないことが一番大変。区役所や病院には通訳がいるので本当に助かる。 ・日本語は、生活のなかで身につけてきた。まだ難しいと感じるが、日常会話には困らない。漢字を使っているから覚えやすい
	60 代女性②	※インタビューに通訳なし。日本語にほぼ不自由ない。 ・店をやって日本語に慣れた。特に日本語を勉強したことはない。子育て中に親子で交流しながら、また、教会に通って覚えた。 ・親は日本の教育を受けた。父は在日米軍で 1 年働いていた。きょうだいも日本の大学で学んだ。当時は珍しい親日家の家庭で育ち、日本の歌を聴いた。 ・家庭では母国語を使い、日本の学校に通った子どもたちはバイリンガル。留学した娘はトリリンガル。娘の夫は在日 3 世で、母国語があまり上手でないこともあり、孫は母国語をあまり話せない。

	30 代女性	※インタビューに通訳あり。日本語はあまり話せない。 ・ラウンジの日本語教室に通った。スーパーやコンビニ、レストランで役に立った。もっと長く通いたかったが、朝から勤務があり、行けなくなった。夜通えるとよい。オンライン教室もあるとよい。 ・その後、教会で開催している日本語教室に時々通っている。区の情報リストで知った。土曜日なので行けるが、毎週ではなく、時々通っている。また、漢字学習アプリで勉強している。日本語学校のオンラインクラスは高くて手が出ない。もっと漢字ができるようになりたい。日本語教室ではもっと会話をしたい。
	30 代男性	※インタビューに通訳なし。日本語に堪能。 ・日本語学校で 2 年間学んだ。それまでは日本語を学んだことはない。最初は英語しか話せず辛かったが、やさしい先生に世話になって学んだ。この日本語学校は完璧だと思った。 ・最初はコンビニで買い物もできず、1 か月ぐらいは「帰りたい」と思っていた。「もっとゆっくり話して」とも言えず、おばや日本語が話せる友だちに意味を聞いた。ひとりでいる時は、翻訳アプリが便利だった。 ・その後は職場で覚えた。最初は身振り手振りで「洗い物をして」などと言われ、だんだんわかってきた。利用者さんが教えてくれた。日本のアニメが好きで、アニメの中で「こういう意味か」とわかることもあった。 ・（やさしい日本語と関連して）全部ひらがなで書いてあるとよくわからない。漢字が入っていると読みやすい。漢字は知っていると面白い。 ・故郷では幾つかの言語圏が交わっている。母国には、様々な地方の言語があるので父と母は言語が異なるが、家庭では国の共通言語を使った。英語は学校で習った。英語を話せない人もいる（日本に来ている人の中にも）。
東南アジア	30 代女性 10 代男性	※女性はインタビューに通訳なし。やや不十分。女性は男性の通訳も兼ねる。 ・女性：母国でも日本語を 1 年ぐらい勉強した。現在 JLPT の N3 級。日本に住み続けたいから、勉強して 2 級を取りたいと思っている。 ・男性：母国で 3 か月ぐらい日本語を勉強した。日本語は、少しわかるが難しい。母国にも日本語学校がたくさんあるが、日本で学びたかった。
	30 代夫妻	※インタビューに通訳なし。妻の通訳は夫。 ・夫：来日時は日本語がまったくできなかった。小学校の友だちのサポートがとても助かったが、その子は小 2 で転校してしまった。学校の日本語教室で学び、小 3～4 の頃には自由に話せるようになった。外国人は現在より少なく、同胞はいなかった。中学校に入った頃は日本語ができており、やがて日本語のほうが得意になった。小中学校で入っていたスポーツクラブや部活動もコミュニケーションを育む場だった。 ・妻：日本語は夫がカバーしている。日本語教室を調べたが時間が合わない。ラウンジ教室は午前で通いやすかった。午後の教室は子どもが学校から帰るため通いにくい。様々な事情があると思う。開催日時の幅が広いとよい。 ・娘は日本語ができる。家では、母親や祖父母と母国語で話す。 ・父と母は母語が異なる。父母は日本語が少しできるが、家庭ではそれぞれの母語で話し、3 人で話すときは母国の公用語で話す。
	40 代男性	※インタビューに通訳あり。 ・日本語は、買い物でもあまり使わない。コンビニでは会話しなくても買い物ができる。 ・寺にくる人の日本語力、英語力は、人により様々。来日時は英語も日本語もできない人が多い。 ・外国人支援ボランティアの先生が、毎週寺に来て日本語を教えてくれる。

南アジア	30 代女性	※インタビューに通訳あり。 ・日本語はあいさつ程度。英語は少し話せるが、ネイティブではないためなまりがあり、わからないと言われることがある。 ・現在、市内の日本語学校に願書を出し、現在試験待ち。 ・夫は日本語を話せるが、流暢ではない。
	30 代男性	※インタビューに通訳なし。 ・日本語は、母国にいる時、日本の日本語学校の説明会があり、セミナーに出たら入学できた。他都市の日本語学校で 1 年 3 か月学んだ後、県内の専門学校に入学した。卒業後の就職先では、英語と日本語を使った。英語は学校で学んで書くことはできたが、話す機会はなかった。営業を通じて話せるようになった。 ・現在は日本語にまったく不自由がない。強いて言えば、カタカナを読むのは今も苦手。漢字のほうが読める。漢字は生活する中で覚えた。 ・同胞の間では、日本は役所から書類が多く届くが読めない、英語や母国語だったらいい、メールで来てもいいと話している。コックとして来ている人は、日本語教室がもっとあるといいという。母国では今は公立校でも英語教育がなされ、学校で学ぶため、若い人は英語のほうが日本語より慣れている。
	60 代女性	※インタビューは通訳なし。 ・日本語は独学。夫の最初の日本赴任の時、テレビや子どもの会話から学んだ。自分で勉強して N3 の試験も合格した。私の母語と日本語は文法が同じ。 ・私は育った地方の言葉と、結婚して住むようになった都市の言葉と英語とフランス語ができる。 ・外国人とって日本語は難しい。自分にも漢字は難しいことがある。かな・カタカナがあれば読めるが。 ・日本人も英語でコミュニケーションでき、外国人は日本語が使えるようになるとよい。通訳したり、やさしい日本語にするとニュアンスが変ってしまう。
米国	20 代男性	※インタビューに通訳なし。 ・日本語は、2 年前から母国の大学で学び、日本の大学の日本語プログラムにも参加した。現在大学院では文法、待遇表現、尊敬語、謙譲語、丁寧語、漢字の読み方など専門的なことを学んでいる。日本では尊敬語や丁寧語が使えることが重要と認識している。言葉と文化は不可分。人々と交流し、日本人の心を学びたい。漢字は音読み、訓読みがあり誤解することもある。人と話すことが大事。店に入ると日本人の店員が、外国人が来たと驚くことがある。日本語ができないと申し訳なく思う。日本語は、試験勉強と、人々と心通わすコミュニケーションの両輪で学んできた。 ・現在通っている大学院では、日本語でオリエンテーションを受けた。自ら日本語に馴染むよう、区役所での手続きは全部自分でするように言われる。住民登録の手続きに行った際、区役所は、日本語がよくできる人とまったくできない人の 2 種類しかないと考えているのではないかと感じた。日本語がある程度わかる人もいるが、法律用語等専門的なことはわからない場合もある。日本語の習熟のためには、チャートがあるとよいのではないかと思う。例えば「お金」から「税金」に進むなど、わかりやすい言葉から段階的に専門的な用語の理解へと進めるように。 ・ゼロスタートの人への対応については、母国はオープンで、自分の気持ちをはっきり言うが、日本人は心で話す力が強く理解が難しい。しかし、交流する気持ちがあれば説明できる。ビジネスでも生活レベルでも、理解を見出せると思う。

欧米	50 代男性	※インタビューに通訳あり。 ・街に出ての買い物等で困ることはない。 ・現在、日本語は週 3 回、オンラインで学んでいる。うち 2 回は、文法や会話等を総合的にカバーしているが、広く浅い。教科書は使わず、わからないことがあれば Q&A で対応する。もう 1 回は、子育てに必要な日本語を学んでいる。子どもが使う言い回しや、子どもが歌う音楽、幼稚園でのコミュニケーション等。教室は、オンライン外国語学習マッチングサイトで探した。娘を幼稚園に送り迎えするなかで少しずつ覚えてきている。親同士で、翻訳アプリを使ってやりとりして教えてもらうこともある。 ・娘は日本語を話すが、ボキャブラリは英語のほうが多い。家では英語を使う。 ・街の中では、英語表示があるにこしたことはない。自転車を置いていいかどうかは、スマホの翻訳機能で調べている。「やさしい日本語」については、来日当初に対応してくれれば、もっと理解できたかもしれない。漢字をあまり使わないか、漢字にふりがななどがあれば、来日してすぐの人は助かるだろう。
	60 代男性	※インタビューに通訳あり。 ・最初に知り合った日本人家族から、基本的な会話は教わったが、文法を学んだわけではない。職場では英語を使い、日本語は必要なかった。妻（日本人）も英語が上手で、家庭でも英語で話した。マイホームの手続きも、請求書等の書類も、妻任せだった。娘たちは学校で日本語を学んだ。定年後、故郷は日本。自ら日本語を使えるようになる必要があると考え、学ぶことにした。 ・やさしい日本語の使用について、敬語はビジネス文書では必要だが、日常会話では必要ない。若い人の日本語はアニメ的で、例えば「東京に行く」は「東京行く」となる。文法は別として、会話は短いとわかりやすい。日本語の翻訳は難しい。同じ言葉で様々な意味がある。やさしい（プレーン、シンプルな）日本語の推進には賛成したい。

（7）生活に必要な情報の入手や困りごとの相談

①情報の入手先や困りごとの相談先

生活情報の入手は、身内や同郷ネットワーク、ママ友のつながりがあればそこから、また、日本人学校、外国人学校、国際交流ラウンジや地域の NPO 等も入手先となっている。ネット検索や翻訳アプリもよく利用されている。祭り等の情報は、自分で調べたい、日本人がよく見る情報を知りたい、というニーズもある。

困った時の相談先も、身内や同郷ネットワーク、ママ友、職場の人が多いが、制度利用に関することは、区役所や国際交流ラウンジを頼りにしている。また、本当に困っていることは誰かに相談しにくい、小さなことを相談したら迷惑ではないかと思うという声もある。

インタビュー協力者のなかには、同胞の相談を受ける人もみられる。病院への付き添いのほか、家庭内暴力や事件への対処等、公的機関との連携が必要な場合もある。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20 代女性①	・生活に必要な情報は、同郷の親戚や知り合いから得たり、相談する。私が日本に来た時、父は学校のことで困ることがあると区役所に行った。ラウンジも相談先。横浜市からアンケート調査が届いた時、本当に市の調査なのか不安で、ラウンジのスタッフに相談していた。

東アジア	20 代女性②	・生活に必要な情報は、父母は、親戚、友だちから得る。同郷ネットワーク。 ・困った時は自分で調べる。周りの人、友だちに聞く。父母は娘や親戚に聞く。
	30 代夫妻	・夫：情報は自分で調べたい。自分で探せる方法を知りたい。今ほしい情報は、祭りなどのイベント情報。3 か月暮らして慣れて来るなかで、通りかかってイベントとわかることもあるが、まだ見つけにくい。母国語の SNS 情報は古いことがあり、少し違う気がする。日本人が見ている情報がよいが、日本人のよく見るサイトがわからない。 ・妻：最初はマナーがわからなかった。例えば、電車では携帯での会話はＮＧ、リュックは前で持つなど、書かれていないルールがわからず、日本語教室の先輩から教えてもらったりする。ゴミの出し方は、来日当初に暮らしのガイダンスで勉強したが、実際にこれは燃えるゴミかなどわかりづらい。仕事やビザのことなどで正式な情報がほしい時はラウンジが一番よい。ラウンジスタッフに聞くほどでもないことは、日本語教室のクラスメイトに聞く。買い物の場所も情報交換している。同胞とは母国語、他国の人とは簡単な日本語や英語で。
	30 代女性	・生活に必要な情報は、ママ友のコミュニティで知る。たまたま同じマンションに住む同胞の家族と子ども同士が友だちになり、母親同士で情報を共有する。 ・困った時の相談先も、ママ友のコミュニティ。
	40 代女性①	・生活情報は、地域の NPO が、ゴミの出し方、お店、アートの材料、食材等を掲載したガイド資料を配っている。日本語と英語版がある。中国語版もつくるとのことである。 ・地域の NPO には韓国語、中国語、英語の通訳がいて、相談支援が得られる。通訳がいて安心だが、仕事のやりとりが中心。 ・携帯の契約は、日本人の知り合いにサポートしてもらった。長く日本に住む漢字圏の知り合いにも助けられる。 ・本当に困ったことを誰に相談すればよいかわからなくて困っている。小さなことを聞いても迷惑ではないかと。安心して相談できるか悩んでいる。
	40 代女性②	・情報の調べ方は人による。自分で調べる、友だちに聞くなど。友だちがいなければラウンジや地区センターなど。私はママ友同士で情報交換してきた。やがて夫より自分のほうが、情報豊富になった。 ・夫婦とも外国人の場合、国際結婚（配偶者が日本人）の場合より大変だと思う。仕事が忙しく、学校に来る余裕もないと感じるが、今は学校も理解が進み、担任の保護者に対する配慮もある。
	60 代男性	・困った時は姉がいた。行政や民団等は、頼ったこともその必要もなかった。 ・外国人パートは、困った時の相談も同胞同士がよいようだが、（生活情報の入手等は）前より不自由がないようにみもえる。
	60 代女性①	・ちょっとしたことなら職場の人などに聞くが、それほど大変なことはなかった。教会の信徒同士で相談を受けることもあるが、それほど悩んでいることを話し合わない。自分のことは自分で管理しないと。本当に困っていることを相談したり、助け合うことは難しい。 ・区役所に相談窓口があるのは助けになる。
	60 代女性②	・情報は、漢字が入っていればわかる。若い頃は好奇心で、まちがってもいいからとトライした。今の若い人は情報を探してから来日する。 ・困った時、自分は母に相談した。日本の役所にはあまり行かない（差別があると言われている）。しかし、今の若い人たちは恐れることはなく、必要なら行動する時代。自分の時代とは違う。

東南アジア	30 代男性	・困った時に相談を受けることがある。
	30 代女性	・必要なことは自分で調べる。また、職場や職場の同僚と情報交換する。
	30 代女性 10 代男性	・横浜でのゴミの出し方は、日本語学校のサポーターに教わった。困ることがあると SNS グループで聞く。母国語の相談窓口は知らない。 ・わからないことは先輩に聞く。
	30 代夫妻	・マイナンバーカードが保険証と一体化する等の制度の変化には、自分は職場の人に聞いて対応できるが、会社に行っていない人にはわからない。生活情報のサイト、多言語の案内があると助かると思う。 ・困ったときは、職場の人に聞いたり、自分で調べる。制度利用に関わることは区役所に行く。
南アジア	30 代女性	・現在は翻訳アプリを使っている。英語の表示やマップは、あったらよい。 ・ゴミの出し方等の生活情報は、漢字だとわからない。わかりやすい日本語、わかりやすい英語での案内があるとよい。ゴミの出し方等生活のルールは、夫が教えてくれるため、それほど困っていない。ゴミは夫が出している。ゴミを分別して、決まった曜日に出すシステムはよいと思う。 ・困ったときは、夫に相談する。今までそれほど困ったことはないが、困ったらラウンジに相談する。
	30 代男性	・困りごとは、同胞のネットワークの中で誰かとつながる。キーパーソンがいて、例えば、病院への同行を頼まれても自分がだめなら他の人に頼むなど。困った時の相談は、日本人のほうが早いこともある。同胞コミュニティで知られたくないことを相談するなど。 ・母国語で何でも相談できる相談窓口があったらいいと思う。自分もよく相談を受ける。家庭内暴力の相談等も。今は個人としてアドバイスしている。必要に応じて警察に連絡したり、病院に一緒に行くこともある。
	60 代女性	・生活情報は、横浜の地域情報誌が情報源。毎月来るので覗く。ネット検索も活用している。 ・夫の会社に生活ガイドブックのフォルダがある。何かあった場合は夫がメールか電話で会社に連絡する（夫は日本語があまりできず、英語）。 ・困った時の相談等は、日本に長く住む同胞の女性を頼る。
欧米	20 代男性	・学校、大家さん、日本人の友だち、大学院の外国籍の同級生を頼る。
	50 代男性	・おばやいとこを頼る。
	60 代男性	・妻が頼りだったが、今は自ら調べている。漢字はアプリを活用して読む。 ・勤めていた学校は、新任の先生、来日したばかりの家族へのサポートを大事にしている。最初に住まい、次に銀行口座開設、区の生活情報をサポートする。家族へのサポートは、PTSA（保護者・教師・生徒組織）が担う。

②生活情報ＱＲコードステッカーについて

全員「あるとよい」と答えた。ステッカーの貼付場所のアイディアも豊富に出された。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20 代女性①	・関内の駅前に貼るとよい。区役所の出入口にも貼るとよい。 ・イラストはあったほうがいいが、それより多言語対応であることがわかるとよい。日本語がわからない、特に 40 代以上には便利だと思う。 ・区役所とラウンジの 2 本立てで QR コードからアクセスできるのは、わかりやいやすいと思う。
	20 代女性②	・あれば使う。
	30 代夫妻	・スポーツ観戦の情報もあるとよい（ラグビー、プロレスなど）。

東アジア	30 代女性	・暮らしの情報と新着情報の区別がわかりやすいとよい。 ・ラウンジに金曜日に行くときインフォメーションを見る。QR コードも入口に貼ってあれば見る。今のままだと見ようとは思わないが、イラストがあれば見る。 ・他にほしい情報としては、子どもの学校の情報（親として知っておくべきこと、偏差値のこと等）、住まいの情報。
	40 代女性①	・ＱＲコードは助かる。掲載してほしい情報は、自転車をどこに停めたらいいかということ。ＮＧの看板はあるが、駐輪していい場所の案内はない。グーグルで検索しても駐車場情報のみである。 ・ＱＲコードの真ん中にロゴが入るとわかりやすくなる（例えば、子育てならベビーのイラストを組み込むなど）。
	40 代女性②	・ステッカーは便利と思う。貼るとしたら、学校、幼稚園、家族で行く子どもの施設など。子どもがいない人には区役所の窓口。
	60 代男性	・あれば役に立つ。いいことだと思う。いろいろな場所に貼るとよい。インバウンドでやって来る人にも便利。同胞同士は友だちに聞くことが多いが、情報を得る環境がない人には助かると思う。
	60 代女性①	・ＱＲコードは、若い人は使える。年配者は難しいが、あったほうがよい。子どもや若い知り合いに頼めば見てくれる。 ・貼るとしたら、ファーストフード店、スーパーなど。中華街の日本語ができない人にも必要。飲食店、食材店、寺など。
	60 代女性②	・外国人が営む店に貼ったらどうか。飲食店だけでなく、食材店などいろいろな店。寿司は同胞の間でも人気があり、寿司店もよい。同胞団体にも。
東南アジア	30 代女性	・学校に貼るとよい。外国人が買い物等でよく行くところ。
	30 代男性	・ステッカーは心強い。（貼るなら）アジア食材店は区内に複数ある。同胞が集まるレストランもある。
	30 代女性 10 代男性	・日本語がわからなければスマホの翻訳機能を使うから不便はないが、ＱＲコードが多言語なら使いたい。ステッカーを貼るなら、同胞が行くカラオケがある。
	30 代夫妻	・外国人がよく行く店がいいのではないか。研修生が増えて、伊勢佐木町や横浜橋の店によく行く。母国語の案内があるスーパーもある。駅や桜木町の地下にもあるとよいのではないか。
	40 代男性	・ＱＲコードは、寺に貼っていただきたい。同胞が営むレストランにも貼れるとよい。
南アジア	30 代女性	・自分は夫に助けてもらっているが、ひとりで来日した人、学生さんはよく使うのではないか。ステッカーがあることを知らせることが大事。 ・駅やスーパーなどに貼るとよい。
	60 代女性	・原案で十分だと思う。すばらしい。
欧米	20 代男性	・すばらしい。
	50 代男性	・町の人が集う場は、社会参加の機会となる。地域のイベント情報も得られるとよい。
	60 代男性	・ステッカーは、ショッピングセンターやスーパー等の店舗、外国人が通う学校のほか、自治会・町内会の掲示板にも、ラミネートして貼ったらどうか。 ・ＱＲコードからの情報アクセスは、とても便利だと思う。

（8）社会変動の影響

コロナ禍や円高、物価高は、日本人と同様に生活者に厳しさをもたらした。日本語学校の友だちには、帰国や他の国に行こうと考えている人もいたと語られた。母国に送金している人にも厳しい。

飲食店等の経営者には痛手がみられる一方で、会社員や大学生は、コロナ禍でもリモートシステムを活用して乗り切っている。身内が亡くなってもコロナで帰れず、こちらで供養したいという人もいた。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20代女性①	・父母の仕事は、コロナの影響があったと思う。
	20代女性②	・コロナ禍で講義がオンラインになり、大学にあまり行かなかった。メリットもある。早起きしなくても1限目に間に合う。コンビニのアルバイトは、あまり影響がなかった。 ・円安は、外国に行かない限り影響は感じない。
	30代夫妻	・日本企業から円で給料をもらっており、影響がある。物価高もあり、厳しい。日本語教室で学ぶ友だちの中には、帰国を考えたり、他の国に行こうかという人もいる。
	30代女性	・夫の給料は日本円で支払われるため、日本人と同様。給料の上昇より物価高の上昇のほうが大きく厳しい。子どものほしいものを優先に、大人は節約をしている。夏休みに母国に帰る時は有利。
	40代女性①	・2020年に海外で個展を開いたが、コロナ禍により3週間で帰国した。その後コロナで移動ができなかった。 ・物価については、昔と違って現在は母国の通貨が強くなり、円安は助かっている。母国の制度上、今は不動産価格が高く、若い人が家を買えずに海外に移住する傾向がある（人材の流出が危惧される）。
	40代女性②	・コロナの時は外食をしなかった。家族で出かけなくなり、運動不足になった。親しい友だちと、あまり連絡をとらなくなった。（日本ではコロナに罹らなかったが）去年久しぶりに里帰りした時、コロナに罹った。 ・物価がすべて高くなった。
	60代男性	・コロナは大変だった。店の経営に支援もいただき、乗り越えてきたが、今は物価が上がり先が見えない。経営は発展より縮小する方向にある。給料で生活する立場になったらどんなに楽か。物価高の影響は大きい。仕入れ値も1.3倍、1.5倍になり、光熱費も、人件費も上がっている。その分を値段に載せると買ってもらえない。コロナから少しずつ上がり、今は一気に上がった。ついていけないが、知恵を出して対応していく。
	60代女性①	・円安、物価高は仕方ない。母国より日本政府のほうが物価を落ちつかせてくれている。日本のものは質がよく、少し高いのは当たり前。帰国すると質がよくなくて高いと感じる。
	60代女性②	・コロナは、店を経営する上では大変だった。 ・コロナ禍の時期に入院を経験したが、日本の医療は素晴らしい。差別もなく、ありがたいと感じた。
東南アジア	30代女性	・コロナは、日本に来て住民登録をしたら、すぐに予防接種の案内がきた。日本語だったが、アプリでの予約は英語対応で、自分で予約できた。2022年春には学校も普通に開いていた。 ・円安・物価高は、給料が上がったから問題ないが、スーパーで1週間の買い物をするとき以前は1万円で済んだが、今は値段が上がっていることを感じる。

東南アジア	30 代男性	・コロナの時は日本にいた。会社の対応は適切で、無事に勤務を続けた。 ・物価高は、給料があるため困らないが、円安は打撃。実家に送金しており、当初の倍ぐらい送らないと間に合わなくなった。
	30 代夫妻	・夫：自分はコロナの影響はなかった。 ・妻：コロナで子どもは幼稚園に通えず不便だった。買い物も大変だった。物価高は大きな打撃。子どもの学費が掛からないので助かる。
	40 代男性	・コロナ禍で、レストラン等接客系の店の経営者は、客が減って困った。逆に、寺に来る人はいつもより多かった。故郷の父母が亡くなり、コロナ禍で自身が帰れないため、横浜で供養したいという人もいた。 ・寺に来る人々の一番は経済の問題。売り上げが上がらないのに税金が高い。日本人も同じだと思う。円安は、母国の家族に送金をするには影響が大きいが、日本で生活するには関係ない。送金がない人には、物価が上がって困るのは、日本人と同様。
南アジア	30 代女性	・コロナ禍の期間は、まだ結婚しておらずわからないが、夫は仕事がなかったのではないか。 ・物価高については、その分、給料も上がるとよい。
	30 代男性	・来日時には日本円で 18 万円が母国の通貨では 10 万円、現在は 12 万円が 10 万円だが、まだ円が強い。昔に比べたらいいほうだ。仕送りしている人は大変。仕送りせず日本で生活している人にとっては、物価高は日本人同様に厳しい。
	60 代女性	・コロナの後、コミュニケーションが変わった気がする。ソーシャルディスタンスを取り、バスも隣に座らないなど。 ・円安は旅行者にはよいが、家族で暮らしていると物価高を感じる。電気代も高くなった。母国もインフレ。一方で、以前は何千円かするものも 100 円ショップで買えるようになった（のでうまく利用している）。ただし、すぐ捨ててしまう傾向が進んだとも感じる。捨てない文化が必要と思う。
欧米	20 代男性	・ウクライナなど避難民の方々等は物価高に苦労しているのではないか。
	50 代男性	・円安は、母国からインカムのある自分にはあまり影響がない。

３．中区での生活について

（1）中区を選んだ理由

夫か親、あるいは、自らの職場があるから、近いからという理由が最も多く、身内が住んでいて、という縁もみられる。

また、横浜が好き、外国人が多く住む、外国人の子どもが多く学んでいる街であることも居住地の選択と、住み続ける理由となっている。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20代女性①	・母の職場に近いため。母は親戚の店で働いている。
	20代女性②	・父の職場が近いから。
	30代夫妻	・夫：住居探しは就職先の会社を頼った。会社の物件が関東他県と中区にあった。外国人は信用の問題で賃貸が難しい。選択肢は少なかったが、会社のサポートを得ることにした。中区を選んだのは、横浜の現場もあったのと、中区のほうが都内に近かったから。それまでは横浜に来たことがなく、中華街があることも、外国人が多いことも知らなかった。空港から送ってくれた会社の人も中華街を知らなかった。
	30代女性	・中区を選んだのは夫の職場が横浜だから。最初の1か月は、会社が斡旋したところに住み、今の住まいは、子どものことも考えて不動産屋に聞いた。会社からは頭金等金銭的な補助はあったが、住まい選びのサポートはなかった。もうすぐ入学という時期で選択肢が少ない中、同胞の子どもの多い小学校区ということで決めた。他にも同胞の子の多い学校があるが、その時にはその情報はなかった。また、近くに総合病院があり、2人目の出産が近づき、緊急時も行きやすいと考えた。
	40代女性①	・アート活動の縁。自分の研究テーマ（多文化研究）としても適地。移民の感覚もあり、食材への影響も調べられる。中華街も大事。第二次世界大戦後に大陸から台湾に移住した方々がいる。台湾式の中華料理も多いなど、（両国の共存がみられ）研究対象となる。店のオーナーに、食材、食べ方など、日本人に合わせた変化、どうして移民したかなどをインタビューする。
	40代女性②	・現住地への転居は、夫が、外国人が多いところだからと考えたと思う。横浜は外国人が多いということがピンとこなかったが、後でその考えはよかったと思った。他市では友だちがいなくてさびしかったが、横浜に来たら街のなかで母国語が聴こえてきて、それだけで心強く、気持ちが元気になった。
	60代男性	・姉が住んでいた縁。
	60代女性①	・知り合いがいたから。
	60代女性②	・夫の留学と仕事。駅に近く大学にも行きやすかった。 ・当時、私のきょうだいも区内、市内に住んでいた。
東南アジア	30代女性	・職場がある。英語版の「横浜の歴史」という本を読むと、中区について書いた箇所が特に多く、外国人にやさしいまちであることを知った。 ・最初に住んだアパートは、職場から紹介された英語対応の不動産業者の仲介。もっと広いところに住みたい希望もあり、職場の友人に他の不動産業者を教えてもらい、区内で選んだ。
	30代男性	・おばがいた縁。おばは、こちらで結婚して住むことになった。最初は外国人が多いとも感じていなかった。
	30代女性 10代男性	・女性：横浜が好き。住みやすいと思った。母国の日本語学校が紹介する区内の日本語学校に通った。横浜で学びたいと思って選んだ。寮は歩いてすぐだった。
	30代夫妻	・父の親戚がいるため。

	40 代男性	・宗教者として同胞を励ますため。また、知り合いが前からいたので。もともと同胞が多く住んでいた。
南アジア	30 代女性	・夫の職場が区内のため。
	30 代男性	・関内への転職を機に中区に転居した。
	60 代女性	・現在のマンションを、夫の契約先企業から借りて。
欧米	20 代男性	・学校のスタッフの紹介。中区について調べると、外国人向けの街と思った。特に居住地は観光客の受け入れに慣れていて、住みやすそうだと思った。
	50 代男性	・妻の仕事。中区には妻が今の職場に通うようになる前に来て、ウィークリーマンションに住んだ。地域の様子がわからなかったのと、コロナ禍で事前に住まいを探すことが難しかったから。妻の職場からのサポートはなかった。母国では大学が住まいや生活の情報提供をするのが一般的であるが。
	60 代男性	・日本の職場を選んで来た先が中区だった。

（2）住みやすさ・住みにくさ

中区の住みやすさとして、ほとんどの人が「便利」であることをあげている。次いで、「景色がきれい」、東京に比べてコンパクトで閑静、安全で子育てしやすいといった環境があげられている。また、外国人を受け入れてきた歴史がある、外国人が多い、多言語情報が多い、周りの人がやさしい、といった社会のよさがあげられている。

住みにくさについては、「日本語がわからない」ことをあげる人が多くなっている。街の移動で自転車の置き場所がわからないといったことや、繁華街では治安や環境の問題、郊外部では鉄道がないことによる不便さ等があげられている。

また、中区だけの問題ではないとしながら、住まいの確保や銀行口座の利用における信用の問題、年金や選挙権がないこと等での外国人の扱いが住みにくさにつながっているとの指摘もみられる。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20代女性①	・買い物も交通も便利。近くに駅が 3 つある。景観もきれいで住みやすい。 ・住みにくいと感じることは特にない。
	20代女性②	・便利。交通の便は前住区も便利だが、生活は中区が便利。伊勢佐木モールで何でも買える。 ・住みにくい点は特にない。一番困ることは言葉ではないか（中区に限らず）。
	30 代夫妻	・横浜は 2 人とも大好き。人々が優しい。日本人に限らず、他の国の人も優しい。妻がクリスチャンで、2 人で教会に通っている。多国籍の、多様な背景の人がいる。買い物も便利。歩いて行ける距離に八百屋や母国の料理店や食材店もある。多国籍なまちであることは知らなかったが、驚いたとともに、嬉しかった。 ・住みにくさについては、（中区だけではないが）マナーがわからなかった。例えば電車では携帯はＮＧ、リュックは前に持つなど、書かれていないルールが難しい。日本語教室の先輩から教えてもらったりする。ゴミの出し方は、来日当初に暮らしのガイダンスで勉強はしていたが、実際にこれは燃えるゴミかどっちかは、わかりづらい。【再掲】
	30 代女性	・住みやすい点は、多言語情報が多いと感じる。多言語版の広報紙もある。ラウンジフェスタ等、参加できるイベントもたくさんある。そして、みんな優しい。保育園でもやさしい日本語で話してくれる。みんなが意識を持っているからだと思う。環境としては、家の近くに大きな公園があり、補修作業も入ってきれいにしてくれている。子どもと一緒に行ける公園が複数ある。

東アジア		・住みにくい点としては、自転車をどこに停めたらいいかわからないこと。間違ったところに停めたら自転車を持って行かれるのではないかと、子連れで動いても不安。言葉の問題もある。学校の先生は、時間がある時はやさしい日本語で話してくれるが、緊急時は通訳の方がいないと子どものことがわからないことが不安。
	40代女性①	・住みやすさについては、交通が便利。買い物は、近くに 24 時間スーパー、コンビニがある。図書館、なかラウンジもある。 ・住みにくい点については、まちの治安。泥棒に狙われたことがある。窓が半分開いていた。もうひとつロックがあり侵入はなかったが、窓に置いてあったものが道路に置いてあった。すぐに治安がよくなることは難しいが、衛生面がよくなったら改善するのではないか。
	40代女性②	・便利。居住地は駅に近く、（生活に必要なものが）全部揃っている。隣は病院、スーパーが複数あり、横浜橋商店街も近い。美味しい店もある。船の汽笛、電車の音など、様々な音が聞こえ、外に出なくても寂しくない。 ・住みにくいと感じるのは、何でもそろっている大規模ショッピングセンターがないことぐらい。
	60代男性	・とても暮らしやすい。役所が近い。来日当初から、姉の店と学校と自分の家を行き来して不自由はなかった。 ・後から繁華街に反社会的勢力の活動があることを知った。私も店のオープン時にお金を要求された。今は一切そういうことはなく、不安も感じない。 ・横浜港は欧州の文化が初めて入ってきて盛り上がった歴史がある。そういうエネルギーがある地域であり、伊勢佐木町全体がつながればもっと活性化するはず。中区は多国籍。日本の文化と韓国、中国、ベトナム、タイなどがひとつの文化に入れるともっと盛り上がるのではないか。レストラン、食材店も、東京のように駅周辺にもっと入って来るとよい。中華料理や韓国料理などだけでなく、ファミレスなどももっと入ると楽しくなると思う。東京に行くともっと盛り上がり、活性化していると感じる。町内会には年配の考え方がまだ残っている。吉田町・野毛、関内、馬車道、伊勢佐木町、福富町の商店会でともに盛り上げようとしているが、まだまだでもったいない。
	60代女性①	・住みやすい。まず、周りの人たちがやさしい。思いやりがある。環境もよい。生活のどんな面でも自国にはないことがあり、勉強になる。交通の環境もよい。自転車道がある。歩道も広く平坦できれい。 ・一方、繁華街のマンションの上階に長く住んでいるが、最近は焼肉の煙がひどくて洗濯物に臭いがつく。若者の立ち飲み屋は戸を閉めずに早朝まで騒いでいる。警察に連絡しても解決しない。最近はその点が住みにくい。昔と変わって若い人、焼き物の店が増え、上階まで声や煙が上がってくるようになった。マンションの他の住民も感じているのではないか。高齢者や病人もいるかもしれない。せめて時間を制限するなど、改善してほしい。それ以外のことで住みにくいとは思うことはない。
	60代女性②	・他区のことはわからないが、中区は最高。交通の便がよい。不便がなく、寂しくない。外国の言葉が聴こえ、窓から見るといつも人が歩いている。今はますます外国人が増えた。環境もよく、母国から帰って来るとほっとする。 ・不便はなかった。漢字が読めるため意味がわかり、生活のルールも守ることができた。今の若者は何でもスマホで調べ、自分の頃より寂しくないかもしれない。今の人は調べてから来る（からもっと不便はないだろう）。

東南アジア	30 代女性	・中区は好き。いろいろなものが近くにあり、便利でもある。最初の住まいは繁華街に近く、朝ジョギングに行こうとすると酔っ払いがいたが、危険な感じがなかった。夜中にコンビニに行けた。安全な環境。 ・前任地はアジアでも英語が使える都市で便利だった。日本では、日本人に英語を話してもらうというより、自分で日本語を習うことだと感じた。
	30 代男性	・中区から離れたくない。山下公園、みなとみらい、桜木町。自然が豊か。伊勢佐木町は便利。ウロウロするだけでも楽しい。アジア食材店も複数ある。東京、大阪にも行くが、中区が一番。東京は自然がない。 ・繁華街で喧嘩を止めようとしたら巻き込まれた。警察がやさしく対応してくれて、病院に行くかと言われたが、（これ以上関わりたくなく）その場を離れた。また、自転車を 3 回盗まれた。おばに気を付けるよう言われていたが、最初はロックをせずに、次からはロックをしていても盗まれた。自転車置き場を定期券で利用している。
	30 代女性 10 代男性	・女性：母国の店がたくさんある。慣れて来て（今住んでいる街が）一番好き。桜木町駅もあり交通も便利。そして、家賃が安い。日本語学校の寮も現在も家賃負担は約 4 万円。 ・女性：特に不便はない。母国でもアルバイトをしていたが、給料が安く家賃は高く、日本より住みにくかった。日本語でわからない表示があればスマホを使って調べる。
	30 代夫妻	・便利で暮らしやすい。買い物も不便がなく、徒歩でも自転車でも便利。 ・子どもの通学に付き添う際、見通しの悪い通りで車がとばす。学校までは徒歩で 10 分ぐらい。登校班はない。通学時間帯は車が入らず、週 3 回、警察官の誘導があるが、通学路が子どもには危険。また、買い物の時間が不便。母国では朝の 5 時、6 時から店が開いていて、子どもを学校に送った後にそのまま買い物ができるので、時間を有効に使える。夜も開いている店もある。
	40 代男性	・駅が多く、スーパーも多く、同胞も多くてサポートしてくれる。欧米やアジアの各国に赴任した経験がある。それぞれ異なり比較は難しいが、日本は特に同胞が多く、サポートしてくれる団体も多く、公的サービスも充実している。 ・言葉で不自由なのは病院に行くとき。それ以外は不自由を感じない。
南アジア	30 代女性	・母国以外の国に住んだことはない。まだ来日して半年で比べられないが、電車があり、渋滞がなく、母国に比べると便利。 ・現在、最も難しいのは日本語。仕事をしていなくて、友だちもなく、暇で、時間を使うのが大変。自分の日本語力が低いから。
	30 代男性	・何でも近い。交通も買い物も便利。観光地もある。住みやすい。近くに駅がたくさんある。横浜駅周辺は人が多いが、この辺りは丁度いい。どこに行っても親切。警察も（やさしく）教えてくれる。 ・住みにくさの一番は言葉。来日した学生が役所に行ってもすぐに住所変更できない。携帯も自分で買えない。大人なのに誰かと一緒でないとできない。また、病院は困る。どこがどう痛いか、うまく言えない。通訳として何人かに同行したことがある。他に不便なことはそんなにない。
	60 代女性	・本牧は住みやすい。便利で車も不要。 ・以前の赴任地（他県）は不便だったが、コミュニティは温かかった。 ・現住地は、駅から遠いことが唯一の困りごと。先日、前任地の友人（70～80 代の数人）が遊びに来たがアクセスが大変だった。そんな時不便を感じる。 ・みなみラウンジには、バスを乗り継いで来ている。

欧米	20 代男性	・横浜に来てよかった。以前滞在した他都市と比べて多文化共生社会が進んでいる。わかろうとしてくれる。中区は便利で住みやすい。 ・区役所から保険に関する通知があった。80%わかったが、細かいことはわからない。正統な日本語と英語での説明があれば理解できると思う。自分は学校や大家さんに聞けるが、相談できない人はどうするか。
	50 代男性	・横浜は好き。東京にいた時は東京も好きだったが、家族で住むなら横浜のほうがいい。きれいで忙しくない。子どもが道で遊んでいても安心できる。 ・自分にとって困るのは、英語を話せないこと。文化が違う。幼稚園でも、日本人の間では当たり前のことを敢えて質問する機会もなく、日本語が話せる妻でも同じ状況である。
	60 代男性	・横浜（中区）は、東京のような大都会ではなく、ほどよく田舎で暮らしやすい。また、公共サービスがすばらしい。ゴミ収集等の生活サービス、医療サービスも。電話すれば歯医者に当日予約でき、入院もすぐできる。母国で即日は難しかった。公園も豊かで、子どもたちと、春は桜の花見、秋は紅葉狩りと楽しんできた。オープンで、フレンドリーで、クリーンなまちと感じている。公共交通も便利。駅からバスでどの方面にも行ける。中区周辺には教会が多い。1859 年に開港した横浜には、外国人が多く暮らして来た伝統がある。 ・住みにくさについては、中区に限らないが、1 つには、国民年金が少ないことを問題と感じている。自分は個人で民間の保険に入っているが、そうでない人は日本人も困るのではないか。職場では共済に加入する選択肢もあったが、自分は加入しなかった。現在は強制的に加入することになっているようだ。 ・2 つ目は、外国人の選挙権の問題。44 年間日本で暮らし、37 年間は納税をしても、選挙権がない。日本政府も地方政府も、住民、外国人から遠い距離にあると感じる。母国では、移住して何年か経れば選挙権が得られるはず。 ・3 つ目に、来日してから防災の不安があった。4 つのプレートがぶつかる位置にある日本では、地震と津波のリスクがある。日本に来て、避難所等の勉強をした。2011 年の東日本大震災の時は、学校として生徒を守る役割があり、緊張感があったが、政府も外国人によく対応してくれ、学校としてもボランティア活動を行うなど、震災を機に相互に協力し合あえるようになった。来日当時と比べると、国も自治体も外国人に配慮してくれて、今ではスマホの警報アラームが鳴っても慌てないで済むようになった。

(3) 区内でよく行くところ

買い物の場としては、ほとんどの人が複数のスーパー、複合型の商業施設、商店街等をあげており、選択肢が広いことがわかる。母国の食材が得られる小売店、同胞が集まるレストラン等があげられている一方で、日本人と交流するために趣味の合う人が集まる場所もあげられている。また、山下公園やみなとみらいをはじめ、臨海部の公園等でリフレッシュしたり、仲間と集ったりしている。子育てでは、地区センターや近隣の公園、スポーツセンター等も利用されている。街中は自転車や徒歩で移動する人が多く、ジョギングや散歩、親子で出かける楽しみがある。

医療機関は、通訳のいる総合病院のほか、外国人対応になれたクリニックのほか、一般のクリニック等での受診もみられ、日本語が使える人も、家族や日本語に習熟した人の同伴がないと不安と語っている。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20代女性①	・買い物は、区内では、野毛、桜木町駅の地下、日用品ストア。中央図書館方面や日ノ出町駅のスーパーにも行く。区内で外食はあまりしないが、伊勢佐木モール等。 ・病院は、風邪などは中華街方面の病院。母はひとりで行くが、私が通訳をしたこともある。赤十字病院には父が母の通訳で一緒に行くこともある。妹が私の代わりに行くこともある。 ・その他：大桟橋が好き。
	20代女性②	・買い物は、コンビニ、書籍等販売店、百円ショップ等。地元では外食はあまりしない。図書館にもよく行く。中央図書館。 ・交通手段は、電車と自転車。自転車は家族全員使っている。高校までは自転車に乗れず、約 20 分歩いて通った。自転車を置いていい所は、最初はわからなかったが、今は少しの時間ならどこでもいいとわかり、そうしている。違法駐輪で持って行かれたことはないが、自転車は1回盗まれたことがある。
	30代夫妻	・書籍リサイクルショップ、県立・市立の図書館。書籍リサイクルショップでは、漫画本が安く買えて助かる。ワンピース、進撃の巨人、鬼滅の刃、ナルトなど。アニメも観る。ドラえもん、ドラゴンボールは子どものころ。 ・歯医者は、ラウンジスタッフに教えてもらった。歯医者とは、アプリで翻訳しながら治療を受けた。病院に行く機会はまだない。
	30代女性	・スポーツセンターには子ども向けの苦手種目克服プログラムや父子のバドミントンなどでよく行く。県民センターには、日本語教室に毎週通っている。自分や子どもの日本語教室は、学校の紹介で知った。 ・病院は、外国語対応のあるクリニック。ここが休診の時は近くのクリニックに日本語でかかる。中華街方面の病院は混んでいることが多く、下の子が熱がある時1時間も外で待ったことがあり、行かない。
	40代女性①	・買い物は、近くに24時間スーパー、コンビニがある。【再掲】 ・インド、タイ、韓国など、様々な国の料理店にも行く。横浜は、香料やコーヒーの貿易も始まった開港のまち。これにちなんで6つの国の香料を入れたコーヒーイベントを企画した。 ・図書館によく行く。県立図書館の利用者カードも作った。横浜市立図書館で読んで、県立図書館で借りるなど。 ・主に自転車で動いている。バスはあまり使わない。都内に行く時は電車に乗る。

東アジア	40代女性②	・買い物は、近くの複数のスーパー、横浜橋商店街も近い。 ・子どもが遊べるところにはよく出かけた。近場だけでなく遊園地や動物園など。近場では、こどもの遊び場（地域の公園）、地区センターのプレイルームなど。子どもは習い事も複数している。 ・交通手段は、自転車と歩き。学校には自転車置き場がある。買い物は歩き。
	60代男性	・仕事も中区の中で動いている。食材は専門業者と横浜中央市場から仕入れる。 ・以前は、みなとみらいの商業施設のジムから山下公園を眺めてリフレッシュすることもあったが、今はプライベート返上で仕事をしていてその時間もない。 ・あまり病気をしたことがないが、病院には自分で行った。嫌な思いをしたことはない。友だちに付き添って、通訳したり、面倒をみたことはある。
	60代女性①	・近くに商業ビルがあり、スーパーも複数あって便利。スーパーのセールはうれしい。中華街には、食事や教会に行く。 ・病院は、普段は近くの小さなクリニック（整形外科や心臓内科）に行く。何かあれば赤十字やみなとみらいなどの大きな病院を紹介してもらえる。市大病院や赤十字には通訳がいる。通訳は必要かと聞かれ派遣されてくる。 ・自転車で中区だけでなく、西区、南区にも行く。中区はきれい。山下公園やみなとみらいは散歩にもいい。どこでも自転車で行ける。駐輪には時間制の駐輪場を使っている。違法駐輪すると罰金をとられ、撤去もされるが、その前に警告の貼り紙をしてくれるのは親切だと思う。駐輪場はあるとよい。
	60代女性②	・食材は、モノがよければ、区外にも買いに行く。 ・移動は徒歩。遠いと車。駅が近く電車にもすぐ乗れる。バスはあまり乗らない。
東南アジア	30代女性	・買い物は、近くのスーパー2か所、伊勢佐木モール等。アジア食材店に行ったことがあるが、高い。住まいの近くには居酒屋がない。自炊をするようになり、スーパーに通っている。遅くまで開いていて助かる。職場の友人と、山下公園で缶ビールを飲む。大通公園は芝生がないので山下公園に行く。 ・医療は、英語が通じる小さいクリニックに行ったことがある。職場の同僚がかかっているところ。病院がどこにあるか、緊急時に対応はどうするか、もっと知っておいたほうがよいと考えている。 ・自転車は持たず、徒歩派。毎朝、日本大通りから山下公園辺りまで歩いている。学校にも歩いて通う。ウォーキングによい街。電車を利用する時は関内駅。
	30代男性	・山下公園、みなとみらい、桜木町などに行く。 ・休日は家にいてパソコンに向かっていることが多い。
	30代女性 10代男性	・女性：休日には山下公園によく行く。病院については、アレルギーがあり、友だちの紹介で区内のクリニックに行った。自分で、日本語で説明した。日本語の勉強中は友だちに同行してもらったこともある。 ・男性：近くのスーパーによく行く。アジア食材が置いてある。区内の母国料理のレストランにも行ったことがある。 ・2人とも自転車を使っている。女性は男性のバイト先のレストランに駐輪させてもらっている。男性は学校とアルバイトと寮を自転車で移動している。
	30代夫妻	・買い物は、近くの何か所かのスーパー。少し足を延ばせば本牧のショッピングセンター。母国料理店には行ったことがあるが、家でつくったほうがおいしいので、行かない。妻が幼稚園のママ友にふるまったら評判だった。食材店は、関内、伊勢佐木町、中華街にもある。 ・子どもを遊ばせるのは、みなとみらいの遊園地やショッピングセンター、野毛山動物園等。図書館には行かない。子どもはまだ特に習い事もしていない。 ・病気になったときは、クリニックはたくさんある。夫が一緒に行くため、不自由はない。 ・3人とも、区内の移動は自転車。

	40 代男性	・お布施をいただいており、レストラン等には行かない。
南アジア	30 代女性	・買い物は、関内のスーパー等。桜木町、みなとみらいにも行く。みなとみらい、山下公園には時間を過ごしに行く。 ・大きな病院には行ったことはないが、クリニックには行ったことがある。夫と行った。専門用語は夫にも難しく、日本語がわかる人と行く。 ・自転車は使わない。母国と違ってよく歩く。
	30 代男性	・買い物は、横浜橋商店街やアジア食材のあるスーパー。同胞がよく集まるレストランは隣の区にある。日本人に合わせた味が多い中で、伝統的な母国の料理が食べられる。 ・仕事柄、移動は車が多い。
	60 代女性	・買い物は、近くのスーパーやショッピングセンターなど。アジア食材店もあったが、値段が高くて客がつかず閉めたようだ。今は、野毛のアジア食材店で買う。外食の場合は、母国料理の店でベジタリアン向けに作ってもらう。日本の精進料理はいただく。自宅でも昆布で出汁をとって味噌汁をつくる。 ・病院は、赤十字病院が近いが、紹介状が必要。夜間に娘を連れて行ったことがあるが、診療代が高かった。丘の上にも病院がある。息子がサッカーでケガをして連れて行った際、英語で話したらドクターがあわてた。歯科は、近くに複数ある。小児科は、英語でかかれる医院がある。年に 1 回、外国人を集めてお国料理の持ち寄りパーティーをしている。この医院のことは、同胞の友人から聞いて知った。
欧米	20 代男性	・生活圏は元町。日本人の友だちとは野毛に行く。エスニック料理店や外国通の日本人がオーナーの店など。横浜スタジアムにも行く。近くには落ちつける店、外国人をよく見る店もある。みなとみらいにも行く。学校の友人とは、ハンマーヘッド、象の鼻パークに気晴らしに行く。 ・通学には電車を使っている。自転車は買ったが、あまり使わない。街を感じながら歩くのが好き。
	50 代男性	・買い物は、自転車で 5～10 分のところに行く。様々なスーパーを使い分ける。妻はみなとみらいの商業施設やスーパーにも行く。 ・ゲーム仲間とは、本牧図書館、根岸森林公園で会う。 ・病院は、山手の英語が通じるクリニックに行く。
	60 代男性	・来日当時は、山手方面にはレストラン等も少なく、スポーツも飲み会も、外国人クラブですべてまかなった。やがて、みなとみらいができ、ショッピングセンター、フードコートなどレストランも選ぶのが大変なほど豊富になった。

（4）今後も中区に住み続けるか

ほとんどの人が、「これからも中区に住み続ける・住み続けたい」と答えている。

若い人や一時的な赴任者で、居住が流動的な人も、大切な居住地と捉えている。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20代女性①	・東京に店を持っても、横浜（中区）に住み続けたい。将来家を買うとしたら、横浜がよい。
	20代女性②	・日本は住みやすい。故郷のようだ。アジア以外の国にも住んでみたいが、最終的には日本か母国（日本かな）に戻って来ると思う。中学生ぐらいで日本に来た後輩には「最初は日本語が難しいし、戸惑うこともあるが、そのうち楽しくなってくるよ」と言ってあげたい。
	30代夫妻	・今のところ、横浜で安定した生活を続けていきたいと考えている。日本に長期滞在することを予定している。 ・子どもが生まれたら、日本で教育を受けさせたい。【再掲】
	30代女性	・夫の仕事で長期に住むことを希望しており、永住権を申請している。家を買って住み続けたい。子どもの学校、下の子の幼稚園もここで通わせたい。 ・日本語学習やイベントで助けられた。今は子育てをしながら日本語を勉強しているが、子どもが幼稚園に入ったら、今度は自分がボランティアでサポートできる人になりたい。
	40代女性①	・願望として、3年は横浜にいたい。ビザが下りなかったら仕方ないが。来年は海外で活動する計画があるが、横浜と母国を中心に生活したい。 ・(海外と比べて）日本人は、ニーズをよく聞いて、アドバイスしてくれる。これは母国にはない文化。他国に比べてゆったりしている。日本人の職人気質は、アーティストとしてももっと知りたい。奥ゆかしさに慣れなかったが、今はやさしさがわかる。本音と建て前もわかるようになった。 ・外国人が日本で家を借りるのが大変難しい。家探しをどうしたらいいか。窓口で相談して解決していきたい。
	40代女性②	・これからもずっと住み続ける。最近姑が亡くなり、夫と自分たちの老後について話し合うようになった。 ・故郷には、娘が小さい頃は年に1～2回帰っていた。コロナで4～5年帰れず、去年1回帰った。今後も帰るつもり。
	60代男性	・今後も日本に住み続ける。日本と日本人が好き。今は同胞より日本人の友だちのほうが多い。第二の故郷。骨をうずめるつもりでいる。 ・中区で商売をしてきて、今後どう役立っていこうかと考えている。 ・帰国は、コロナ前は年に1回ほどしていたが、コロナ後は一度も帰っていない。
	60代女性①	・ライフプランは、その時々で変化してきた。最初はお金が貯まったら母国に帰るつもりだったが、子どもが来日して変わった。母国も愛する人の国も大事。これからも、きょうだいのいる故郷と行ったり来たりして過ごす。 ・最後まで横浜（中区）で暮らしたい。墓も決まっている。夫の眠る墓に入る。
	60代女性②	・生涯日本（中区）に住み続ける。住みやすいから。
東南アジア	30代女性	・今の仕事は気に入っており、日本に住むのは楽しいので、できる限り住みたい。
	30代男性	・横浜（中区）にいられるなら住んでいたい。 ・実家には8年間で1度しか帰っていない。父母は2回横浜に来て、ここに住めたら住みたいと言っている。（将来は）家をつくって父母を連れて来たい。
	30代女性 10代男性	・女性：特定技能2号になり、職場でリーダーになりたい。中区に住み続けたい。 ・男性：日本で大学に入りたい。

東南アジア	30 代夫妻	・これからもずっと住み続けたい。 ・夫：通訳の仕事には興味がある。 ・妻：日本語を学びたいが、時間や場所が合わない。
	40 代男性	・自分は、ビザの関係で 3 年ごとに更新するが、ずっと日本にいたい。母国にはしがらみがない。父母に会いたい時は帰省すればよい。日本の雰囲気が好き。3 年前には四国遍路にも行った。毎年行きたい。 ・寺に来る人々は、長く住む人が多い。30 年以上住んでいる人もいる。
南アジア	30 代女性	・今後も住み続ける予定。自分も働きたい。そのため、日本語を勉強してスキルを高めたい。
	30 代男性	・ずっと住み続けたい。本籍も中区。
	60 代女性	・夫の会社との契約期間が終わり、2 か月の滞在予定が 1 年延びて現在に至った。もう 2 か月延びるかもしれないが、近々帰国することになるかもしれない。 ・日本は暮らしやすいが、年金の心配があり、住み続けたくても住み続けることは難しい。夫の年齢もある。夫は、在日期間が短く年金額が少ない。母国はまだ年金制度が整っておらず、母国の年金も少ない。エンジニアでも IT 系ではないので、仕事の継続性もわからない。
欧米	20 代男性	・母国の大学の研究室では、ウイグル地域から日本に来る人を対象に、オーラルヒストリーを採集する研究をする予定。ウイグル系人材が国会議員に選ばれた。ウイグルから来日した人々は 4 千人ほどいる。異文化、多文化に関わる声を聞きたい。 ・長期的に日本、元町に住み続けたい。将来は、日本で通訳か、少数民族のための人権擁護の専門家になりたい。あるいは研究を続けるか。「心の言語」で語り合っていきたい
	50 代男性	・妻の定年までは住み続ける。妻の両親がよく来るため、家を探しているが、3 年居住するまでは買えない。子どもの学区、友だちから離れないことを考えると、中区（同じ生活圏内）で探したい。
英国	60 代男性	・もちろん住み続ける。その先は外国人墓地に入る。

４．行政サービスについて

（1）行政サービスの利用・満足度・要望

区役所の対応には「満足している」という人が多い。以前より多言語対応が進んだという評価もみられる。一方で、より多言語対応を進めてほしい、異文化に対する理解がほしいという声もある。

行政サービスにも「満足している」という人が多い。一方で、日本語がわからないことで手続きが大変、もっと多言語対応のサポートがあるとよいという希望もみられる。日本語がわかったとしても、手続きが難解とも語られている。また、災害時の外国人対応の充実が必要との指摘もある。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20代女性①	・あまり区役所には行かない。何かあったら行くが、1回でだいたい解決する。要望はあまりない。
	20代女性②	・行政サービスで困ることは特にない（行政との接点があまりない）。区役所には通訳がいて、ラウンジもある。 ・救急車の要請が多言語でできることは知らなかった（利用したことがない）。
	30代夫妻	・満足している。区役所は熱心で、辛抱強く教えてくれる。
	30代女性	・他市在住時は子どもが2歳だったが、ワクチン情報や日本語教室の情報もなかった。市役所ではマイナカードで（漢字を頼りに）必要な手続きをしたのみで、日本語を話す機会はなかった。中区では、それらの情報が得られるし、外国人が多く、英語でも問題解決ができ、暮らしやすい。 ・来日したばかりの時、区役所で、英語で対応してもらえるとよかった。職員が困ってしまっていた。英語でコミュニケーションしたかった。 ・救急車が無料であることは知らなかった。多言語対応であることは中区の中国語広報紙（春夏秋冬）で知った。しかし、希望する病院に行けない可能性があること、行先の病院で母国語が通じないこと等を考えると、どうしてもの緊急時以外は使わない。
	40代女性①	・ＱＲコードでつながるサイトが充実するとよい。 ・多文化の人々が知り合えるイベントがあるとよい。
	40代女性②	・ほとんど満足している。 ・救急車が無料で、各国語対応してくれることは知らなかった。命に係わること。外国語でも救急車が呼べるということを、周知する必要がある。
	60代男性	・特に要望はない。手続きも以前よりスピーディになってきている。（強いていえば）臨機応変、柔軟な対応は窓口の人によって違う。もっと柔軟だとよい。
	60代女性	・区役所には（必要があるとき）よく行く。夫が亡くなって泣きながら手続きをしたら、税務署の人がもらい泣きをした。年金の窓口の担当者も言葉を詰まらせていた。役所の人の対応もやさしい。 ・行政への要望は、飲み屋街の環境の問題解決のみ。
	60代女性②	・中区役所の窓口対応は親切。店の関係で食品衛生関係の窓口にも行くが、嫌な気持ちを持ったことがない。 ・息子の急病で救急車を呼ぶと、こちらは動転しているのに、親子で姓が違うことを必ず聞かれ、毎回説明しなければならない。母国では親子で姓が異なることを知っておいていただきたい
東南アジア	30代女性	・区役所にはマイナンバーカードや住民登録等でたまに訪れる。手続きは英語版があり、特に不便は感じない。英語ができるスタッフもいる。いつきても英語を話せる人がいて、今より日本語ができない頃から満足している。 ・救急車が多国語対応であること、無料であることは、職場の生活ガイダンスで知っていた。

東南アジア	30 代男性	・区役所には書類を取りに来る。証明書等。窓口担当は、やさしく対応してくれる。最初は英語で案内してくれた。今は日本語を使う。日本に来る同胞は英語が話せる人が多い。英語での案内があると助かると思う。
	30 代女性 10 代男性	・女性：区役所に行くことはある。必要な通訳は同胞同士でする。市役所でマイナンバーカードの手続きをした時は、翻訳機があって、それを使った。病気の時母国語で対応してくれるとよい。救急車の要請が多言語でできること、救急車が無料であることは知らなかった（利用したことがない）。
	30 代夫妻	・バスや電車など公共交通機関はよい。 ・区役所の、特に 2 階で、外国人があたふたしているのを見かける。通訳がもっといるとよい。母国の言語はひとつではなく、わからない人もいる。若い人は英語がわかるが、年配だと母語だけの人もいる。ハローワークでも、コロナで強制退職になった人などは、対応がわからない。自分（夫）は、4 か国語ができることから、通訳を仕事にすることも考えたが、雇ってくれるところが見つからなかった。
	40 代男性	・中区役所にはよく行く。支援は前任地のヨーロッパも充実しているが、日本のほうがさらにしっかりしている。例えば、役所の書類を、ヨーロッパでも作ってくれるが、日本のほうが利用者に対してやさしく、接し方が丁寧。 ・行政サービスには満足している。
南アジア	30 代女性	・行政窓口には英語を話せる人がいるとよい。手続きがわからない。通訳ももっといるとよい。 ・来たばかりの人は、仕事探し、時間の過ごし方で困っている。日本語がわからなくても、もっと自立できる環境、フィーリングがあるとよい。
	30 代男性	・自分としては満足している。
	60 代女性	・災害時の対応。外国人も、災害時も途絶えず情報が取れるとよい。ラジオに 1 つ英語専用のチャンネルを確保して常時情報が流れているとよい。警戒情報だけではなく、その後の対応についての情報もほしい。
欧米	20 代男性	・元町に入居した時、ゴミの出し方がわからなかったが、同じアパートの公務員の住民から、詳しい説明のあるリーフレットをもらって、非常に助かっている。冷蔵庫に貼ってある。転入者向けの生活情報キットは、デジタルキットがあると若者等は役立つのではないか。 ・区からの通知を読んでわからない箇所があれば、写真を撮って送ると説明してくれるサービスがあるとよい（専門的なことは行政窓口で直接聞くようになどの仕分けも含め）。 ・区役所では、難しい質問をしてわからなければ日本語がダメとみられ、簡単な英語の単語で言葉が返ってくる。「いかがでしょうか」という気持ちが大事ではないか。区役所のサービスは進んでいると思うが、スタッフの気持ちが大事。
	50 代男性	・基本的には満足している。子どもを育てる場としてはよい環境。あなた方が取り組んでくれているからだと思う。感謝している。 ・英語のサポートがあると、自分のような人が生活しやすくなる。たらい回しでなく、くらしの案内のような一覧情報があるとよい。例えば、英語対応してくれる医師、歯科医師なども。行政の情報は区役所の関連だけで、生活に必要な情報としては抜けがある。 ・保育園から幼稚園に移る際には、大変だった。大学では日本語で講義をしているほどの妻でも難しかった。日本語の問題だけでなく、わからないことが多い。
	60 代男性	・公共サービスはすばらしい。【再掲】 ・日本は地震や津波のリスクがあり、日本に来て避難所等の勉強をした。来日時当時に比べると国も自治体も外国人に配慮してくれ、今ではスマホの警戒アラームにも慌てなくなった（が、来日してから防災の不安があった）。【再掲】

（2）国際交流ラウンジとの関わり

国際交流ラウンジの日本語教室に通った、イベントでボランティアをしたという人は少なくない。生活情報や困った時の相談先として頼りにしている人も多い。

ラウンジは、区役所で案内された、知人から紹介された、誘われたというケースが多い。一方で、ラウンジを知らなかったという人も少なくない。特に長く住んでいる人は、ラウンジとの接点がない傾向にある。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20代女性①	・父母は、みなみラウンジで日本語を学んだ。友だちからの紹介だったと思う。南区の日本語教室は中区より先に始まったから。 ・私は中学校からの紹介で、なかラウンジの学習支援教室に通った。高校生になると行く回数が減ったが、イベントのボランティアなどをした。高校、大学に進学する時はなかラウンジスタッフに相談した。面接の練習をしてくれた。
	20代女性②	・レインボースペース※メンバーの紹介で、大学院に入る前の春から、みなみラウンジでアルバイトをしている。なかラウンジには、その人と一緒に寄ったことがあり、知っているが、まだ関わったことはない。
	30代夫妻	・中区役所に住民登録に来た時、なかラウンジを紹介された。ラウンジに来てくらしのガイダンスを受けた。ラウンジは親身で、区役所の何階に行ったらいいかも教えてくれる。暮らしのガイダンスは短かったが、ゴミの分別の説明書は助かった。早速玄関に貼った。（ラウンジで案内された）防災ツアーに参加してよかった。カナダで参加したプログラムよりリアルだった。 ・夫：会社に母国語が話せるスタッフがいて相談に対応してくれると思うが、ラウンジが身近なため頼りにしている。 ・妻：日本語教室に通い詰めている。なかラウンジには、火曜日と木曜日の午後のクラスに通っている。ラウンジに通ううちに、相談もするようになった。例えば、旅行者ビザから家族ビザへの切り替え、一時帰国の時の手続きなど。相談しているうちに、スタッフと仲良くなった。情報収集面でも助かっている。例えば、家族ビザになってアルバイトできるようになった時、アルバイトができるとは知っていたが、探し方がわからなった。ハローワークを教えてくれた。母国語の通訳がいる曜日も教えてくれた。
	30代女性	・最初は、住民登録の日に子どもの小学校編入手続きもした際、区役所がなかラウンジを案内、就学手続きのサポートを受けた。 ・その後は2人目が生まれたあと、ラウンジの教室に30回×2期で1年間通った。母国の大学で少し日本語を学んだため、ラウンジ教室は30回のコースになった。今はJLPT（日本語能力試験）の勉強をしている。ラウンジの教室は、カリキュラムがあってよかった。もう1年勉強できるとよい。 ・夫もラウンジの教室に通った。 ・レインボーの夏休みの教室には、子どもが毎年通っている。ラウンジフェスタにも参加している。
	40代女性①	・携帯を契約に行った時、偶然出会った外国人の男性に「日本語ができないなら」友だちが勉強していたと「なかラウンジ」を紹介された。 ・調べたところ日本語学校は毎日通い、授業料も高い。なかラウンジ（に問い合わせたら）ラウンジ教室は週2回で料金も安く、通うことにした。このクラスに入ってよかったのは、スタッフ、クラスメイトと会えたこと。芸術家との話だけでなく、日本の暮らしについていろいろ話せる。 ・ラウンジスタッフと友だちになった。

※外国につながる若者たちの居場所

東アジア	40代女性②	・中区に転居した頃、娘の小学校のクラスメイトのママ（他区のラウンジスタッフ）から母語支援ボランティアのことを聞き、やってみようと、そのラウンジに登録した。バイトより社会に入りやすいと思った。区をまたいでいろいろな小学校、中学校に行き、子どもの支援、保護者の通訳をして、楽しいと思った。「ありがとう」と言われるとうれしい。2～3年経ち、そのラウンジのスタッフになった ・YOKEの市民通訳ボランティアにも登録して、中学校の三者面談に同席した。また、市民通訳ボランティアとして横浜国際フェスタにも参加した際、打ち合わせで訪れた「なかラウンジ」で、区内中学校の母語支援を紹介された。 ・人によって生活も日本語学習へのニーズも様々。日本語教室に通いにくい人も多い。ラウンジの教室は時間が決まっているが、「時間が合わない」「夜の時間帯がいい」「もっと長くしてほしい」といった希望がある。もっと時間帯を広げられるとよい。塾や家庭教師にお金をかけられない人や家庭にとって、お金のかからない教室の提供は必要と思う。
	60代男性	・区役所別館には、店の衛生管理の手続きで行くが、ラウンジに立ち寄ったことはない。今思うと、(食品衛生法に基づく）営業許可をもらうために通っていた時、何か機会があれば話を聞きたかった。少し時間があるとよかった。
	60代女性	・日本語教室に通ったことがある。コンピュータも習い始めたが、やめた。
	60代女性	・知らなかった。
東南アジア	30代女性	・来日して、なかラウンジの「はじめての日本語教室」に通った。2年前。職場での交流タイムに日本語教室の紹介があって知った。その後、毎朝授業があって時間が合わなくなり、足が遠のいた。「はじめての日本語教室」のコンテンツはよかった。もっと長く学びたかった。ラウンジ教室に通うなら夜がよい。また、オンライン教室があるとよい。 ・2年前は、ラウンジ祭りにボランティアとして参加した。 ・ラウンジ（のメーリングリスト）には登録している。メールは、多文化ボランティアへの参加に役立っている。同僚はボランティア情報を知らない。ボランティアをする人はそんなに多くないのかもしれない。
	30代男性	・知らなかった。
	30代女性 10代男性	・女性：他区のラウンジには、同郷の友だちの紹介で来た。「なかラウンジ」は知らない。相談や日本語学習等のサポートは未利用。 ・男性：先輩の紹介で来た。
	30代夫妻	・妻の住民登録手続きで一緒に区役所に来た際、妻が日本語を学べる場所をたずねたところ、「隣でやっている」と「なかラウンジ」を紹介された。夫は利用したことがなく、その時にラウンジを知った。妻はラウンジの日本語教室で学び始めたが、出産・育児によりストップ、コロナ禍で再びストップして、一昨年の秋から学んだ。
	40代男性	・日本で仕事をしている同胞に他区のラウンジを教えてもらい、日本語を学んだことがあるが、コロナ禍で中断した。復帰したいが、現在空き待ち。仕事も忙しく、時間が合わない。 ・昨日、日本人の男性と結婚するために来日した人に、上記ラウンジのチラシを渡した。その人は何も知らずに来日し、寺を訪ねてきた。 ・「なかラウンジ」は、友だちが教えてくれて場所はわかるが、中に入ったことはない。

南アジア	30 代女性	・夫のおばが「なかラウンジ」を利用していた。夫も日本語を勉強した。 ・私は、来日して 2 か月してからなかラウンジの「はじめての日本語教室」に週 2 回、2 か月通った。ラウンジ教室に通って、日本語での日常会話がうまくなった。また、他国出身の友だちができた。 ・夏休みを挟み、これから地域日本語教室で週 1 回、勉強する。 ・相談等の利用はしたことはないが、ラグビー観戦、防災イベントに参加した。今日はこれから、防災のビデオを観る。ラウンジのイベント等は、同胞だけでなくいろいろな国の人たちが交流し、新しい勉強の機会になる。都合に合う日時に参加できるよう、機会がいろいろあるとよい。
	30 代男性	・「なかラウンジ」で英語と母国語のスタッフとして週 1 回働こうと、面接に来たことがある。在留資格の切り替え時期だったからか、話は進まなかった。 ・他区のラウンジで、通訳ボランティアをしている。フェスタの司会もした。 ・YOKE にも登録しているが、（保険の関係で）車が使用できず、請ける機会はない。市民通訳ボランティアは、ボランティアなのか仕事なのかわかりにくい。 ・ラウンジの法律相談は知らなかった。
	60 代女性	・夫が数年前に横浜の企業で働くようになり、他区のラウンジに日本語を習いに来た。私は横浜に来てからコミュニケーションの場がなく、夫がラウンジに誘ってくれた。そのラウンジでは、故郷の料理を教えるなどしている。今回中区に住むようになっても、そのラウンジに通っている。なかラウンジも知っているが、今まで通ってきたラウンジに慣れている。 ・日本人は英語の単語がわかっていても、外国人とコミュニケーションしない。日本の学校は日本語だけ。横浜には外国人学校もあるが、高価である。
欧米	20 代男性	・「なかラウンジ」は知らなかった。
	50 代男性	・妻が子どもの保育園を申し込む際、記入の仕方が難しく、区役所で「なかラウンジ」を紹介された（妻は日本語が使えるが、細かい点は不案内で）。その際、妻がスタッフから日本語教室のチラシを渡され、妻を介して勧められた。 ・来日前は日本語の必要性に思い至らなかったが、来日したら学ぶ必要を感じ、日本語教室に通うのは「いい機会だ」と思った。日本語クラスは、対面式なのがよかった。日本語教室で学ぶ以外のメリットは、英語を母語とする人たちと出会い、話ができたこと。
	60 代男性	・「なかラウンジ」は、チラシ（区の英語ニュース）で知っていた。友人が教えてくれたのをきっかけに、2～3 年前から来ている。 ・国際交流ラウンジはとても大切。ボランティアが親切で来やすいのと、語学の勉強は高価だが、ここに来れば（お金をかけなくても）体系的に学べる。 ・ラウンジの日本語教室の学習者は中国系が多いようだ。中国系のは漢字がわかり、読み書きのキャッチアップは早い。漢字文化圏にいない我々はそれが難しいグループに属するが、（かえって）会話になれるのは早い。漢字のレベル別クラスに分けることを検討していただけるとよい。

５．外国人が暮らしやすくなるために

中区は、外国人が歓迎されていると感じている人が少なくない。周りの人たちがやさしくて暮らしやすいとの声もある。

より暮らしやすくなるため、日本語の壁への対応を望む声が多い。また、自分で様々な選択をするための情報が必要、その情報の所在をきちんと知らせる必要があるという意見もみられる。そして、外国人と日本人が互いに理解することの重要性を指摘する声も少なくない。

暮らしやすい環境づくりとして、外国人も住宅を確保しやすくなるとよい、自転車置き場の問題、繁華街の環境（街をきれいにすれば治安もよくなる）といった意見もあげられている。

国籍	属性	語られた内容
東アジア	20代女性①	・地元中学校は外国人の子が多く、日本語の書類は日本語ができる子や通訳の先生がサポートしてくれるが、学校外では困ることが多いのではないか。ラウンジでのサポートは心強い。私は親戚や友人のネットワークがあったが、留学生はひとりで来日し、相談する人がいない。健康保険や税のことなど。
	20代女性②	・中学生の時は苦労した。国際教室があったが、日本人は私たちの国のことを知らない。中学の時「人口が多くて気持ち悪い国」と言われたり、隣の子が机を離したり。互いを知り合うことが大事と思う。 ・バイト先のコンビニ、すし屋、カフェでは、やさしい客もいるが、（外国人とわかると）嫌なことを言われることもある。【再掲】
	30代夫妻	・情報は、自分で調べたい。自分で探せる方法を知りたい。【再掲】 ・住まい選び。外国人は来日時に信用がゼロ。母国での信用もリセットされてしまう。まずほしいのが落ちつけるところだが、そこでつまずいてしまう。外国人にやさしいまちになる第一歩は、来てすぐに住まいを探せること。会社のサポートがあっても選択肢は少ない。本来は自分たちで選びたい。 ・クレジットカードも作れなかった。それも信用の問題。銀行口座の開設も大変だった（今は開設できている）。
	30代女性	・下の子を保育園に預けるには就労の証明書が必要だが、それがなくても一時預かりによって、自分の時間が持てるとよい。 ・自転車をどこに停めたらいいかわからないこと。間違ったところに停めたら自転車を持って行かれるのではないかと、子連れで動いても不安。【再掲】 ・中区は外国人が多く、歓迎されている。悪い点はないが、やはり言葉が通じないためにうまくいかないことも多い。自転車に置いた野菜が盗まれた時も、どうすることもできなかった。言葉が壁になると、本来できることもできなくなる。言葉の壁を感じることなく暮らせることを望む。
	40代女性①	・一番大事なことは、互いに理解すること。メディアでもSNSでも、考え方をもっと宣伝してほしい。 ・ラウンジでも、いろいろな国の方々が日本の文化を理解し、日本人も外国人を理解し、相互のバランスで暮らしやすい社会に向かっていくことが大事と思う。 ・ＱＲコードから見られるサイトが充実するとよい。多文化の人々が知り合えるイベントがあるとよい。【再掲】 ・（治安がよくないエリアは）衛生面がよくなったら改善するのではないか。街をきれいにすることで犯罪が防げるのではないか。【再掲】 ・外国人が日本で家を借りるのが大変難しい。家探しをどうしたらいいか。窓口で相談して解決していきたい。

東アジア	40代女性②	・ＱＲコードで情報にアクセスできるようになったのは区の努力。今後も期待する。このような情報の入口があることを知らしめることが重要と思う。 ・文化の違い、気候の違いを知ること。マンションでは 24 時間換気していることも友だちから聞いた（子育て時代、友だちづくりに必死だった）。 ・地域の友だちをつくるため、交流の場が大事。そして、自分で行動をしないと始まらない。地域子育て支援拠点があっても、言葉ができないと自信がなく活かせない。日本語教育が大事。日本語を学べる環境があることを知ってほしい。
	60 代男性	・30 年以上前に来日した頃、日本人は上から見ていて、差別が残っていたが、今は逆に外国人が過ごしやすくなっているのではないか。日本語が使えなくてもひとりで動ける。日本人が同じ目線で接していると感じている。日本と母国が身近になって来た。食べ物の臭いも嫌がられたが、今は当たり前。日本と母国は、似ているところもある。食生活も、辛みとニンニクを除けば似ている。むしろ最近は、辛みやニンニクも好まれている。 ・仕事では最初、本名で営業していたが、本名の名刺を渡すと壁ができるのを感じた。名前を日本名にしたら壁がなくなった。1990 年代はじめの頃だった。
	60代女性①	・ありがたい。満足している。平和なのもありがたい。 ・勤めていた会社の中で差別があった。 ・まずは言葉。言葉の勉強が必要。 ・繁華街の環境（焼肉の煙や臭い、夜中も騒がしい等）対策のみ。
	60代女性②	・母国では社会人として生活したことがない。日本で夫と別に生活するようになるまで銀行にも行ったこともないほどだったが、少し日本語ができることもあり、日本のシステムに自然に入ることができた。日本人は知り合いになったら応援してくれる国民性がある。特に中区は外国人を理解する地域と思う。
東南アジア	30 代女性	・外国人に届く情報が少ない。例えば花火大会など、自分で調べないと情報が得られない。学校には情報が届かない。同僚とお互いに情報交換している。私は積極的に調べるが、同僚は自分で調べず、情報を待っている。 ・前任地では、テレビやメールで情報がよく届いた。英語だったこともある。 ・同僚は、銀行口座の開設が面倒だと言っていた。外国人が選択できる銀行が少ない。ゆうちょならＯＫであることなどは、学校から聞いている。
	30 代男性	・同じ国の人と話せる場がもっとあるとよいと思う。
	30 代女性 10 代男性	・今は困ることはない。コミュニケーションがもっとできるようになるとよい。
	30 代夫妻	・日本人と外国人、互いのサポート、関わりがもっとあるほうがよい。困った時声をかけ合うなど。大阪に知人がいるが、大阪では声の掛け合いがある。 ・海外では駅前の目立つところにインフォメーションセンターがある。中華街等にも観光案内があると、外国人は困らないのではないか。東門にインフォメーションセンター（ChinaTown80）があるが、わかりにくい。みなとみらいも、桜木町駅に案内があるが、街に出るとわからなくなってしまう。
	40 代男性	・日本人は親切で気を遣ってくれる。ナンバーワン。
南アジア	30 代女性	・母国と日本の習慣はまったく違う。私たちはオープンだが、日本人はどう考えているかわからない。もう少し話ができるとよい。 ・困っているのは、言葉と仕事。情報はあっても漢字がわからない。在住人口が多い国の言葉でわかるようになるとよい。
	30 代男性	・自国と比べると、日本のほうが便利で暮らしやすい。だから、これを変えたいということはない。周りの人(日本人)も助けてくれる。 ・最近酒癖の悪い若者が多くなった。日本語は勉強をしたほうがよいと思う。文化が違うので、日本のルール、マナーを知ることが必要。暮らしているところの文化に慣れる必要があると伝えていきたい。

	60 代女性	・外国人からみた生活の不便はたくさんある。日本語がわからないからと帰国した人もいる。今はスマホで調べられ、若い人は困ることがないかもしれない。日本語がわからなくても仕事や生活はできるが、若い人は日本語を勉強しなくて大丈夫かなと思う。日本人も英語がわかればよいが、外国人も日本語を学んだほうがよい。外国人は日本語、日本人は英語を使えるようになるとよい。バランスは難しいが。 ・また、横浜年金事務所に年金の相談に何度も行ったが、よくわからなかった。日本語だけの問題ではなく、複雑でわかりにくい。夫の契約先企業には（企業年金について）帰国前に聞いただけで、特に年金相談等のサポートはなかった。
欧米	20 代男性	・ソ連（当時）からの解放後、アゼルバイジャン政府は多言語を認めず、一方、カザフスタンはカザフ人としての誇りから多言語を守るべきと考えた。日本には多文化共生プランがある。日本の伝統に責任を持ったうえで外国人を受け入れ、社会的、政治的に多文化の環境を守るよう方向づけるべき。来日前は、日本人だけの社会と思っていたが、来日してそれほどでもない（多民族国家である）ことを知った。来日する人との共生についてさらに研究していきたい。
	60 代男性	・中区は暮らしやすいが、中区に限らず、銀行の仕組みが国際基準になるとよい。ハッキングにあった際、クレジットカード、デビッッドカードのピンナンバーを変更するため一時帰国しなればならなかった。母国で使っているカードが日本では使えず、義理のきょうだいが来日した際、唯一使える機械があるという銀行まで行かなければならなかった。

第３章　調査からみえたこと（結果の整理）

１．調査結果にみる中区で暮らす外国人の姿

（1）語られたことの整理

インタビューで語られたことから、次のような状況が把握された。

●自らの意志で来た人と、家族の選択で来日した人の自立へのルートの違い

・自ら日本で働くことを希望して来た方は、職業上の満足度も、中区で暮らすことへの満足度も高く、中区の環境を楽しんでいる。住まいや地域情報を自ら主体的に確保したい欲求も強く、外国人であることによる制約（外国人が日本の制度の外にあること等）も問題視している。また、日本語能力試験（JLPT）で一定のレベルに達していても、生活の質を高めるために必要な情報が得にくいなど、言葉の壁に歯がゆさを感じ、より自由に情報にアクセスできる状態を望んでいる。

・留学生として日本語学校で学んだ人は、日本語学校を入口に仕事や住まいを確保する機会を得ている。ただし、自らの力で職や住まいを探そうとする場合、適切な方法にたどり着けないことも多い。ハローワークの利用率は低い。また、母国でのキャリアを日本で活用できない状況もみられる。キャリアの再構築を図ろうとしても、働いている場合、準備する時間がとりにくい。

・配偶者の都合で来日した人は、夫や夫の職場から生活情報を入手することができるが、コミュニティへの参加は、自ら積極的に動かない限り難しい。就労準備も手探りである。

・保護者の都合で学齢期に来日した人は、学校で日本語を習得し、日本に馴染んでいく。低年齢であるほど馴染みやすいが、反面、母語の温存が難しくなる。逆に高校生年齢前後で来日すると、馴染みにくく苦労する。高校から母国の学校に入っていく場合は母国に馴染みにくい場合もある。

●出身国による傾向の違い

・ひとつには、同胞ネットワークの保有状況により、生活情報の入手や困った時の対応力に違いがみられる。同胞ネットワークによるつながりは、人間関係や助け合う関係、母国の文化アイデンティティの維持、仕事の確保には貢献しているが、日本語や日本社会との融和を必要としない。同胞ネットワークがないか参加しない場合、生活情報の入手等は手探りとなるが、若い世代は、翻訳アプリや SNS 等を活用して工夫している。社会関係については、日本人や他国の出身者とのつながりを求めやすい。

・もうひとつは、使用している言語の特徴により、多言語対応へのニーズや日本語学習で必要とすることに違いがみられる。アジア圏出身者でも、若い世代は英語を勉強している人が多く、行政にも英語での説明を求めている。同時に、母国の言語は多様で、自らの母語しか話せない人がいることへの配慮の必要性も示唆している。英語圏出身者からみると、日本語学習については、非漢字圏の人は、読み書きにハンデがあり、漢字圏の人と学習プログラムも分けるべきとの提案がなされている。

●国際交流ラウンジとの関わりの有無

・インタビューからも、区役所で住民登録や保育園等の手続きをする際、国際交流ラウンジを紹介された、友人から誘われたなど、国際交流ラウンジを知る機会が増えていることがわかる。ラウンジで生活ガイダンスを受けたり、ラウンジの日本語教室に通った人が少なくない。日本語教室の修了後は、ラウンジの紹介により地域日本語教室に通うようになったり、ラウンジの祭りにボ

ランティアとして参加したり、他国出身者と知り合えたなど、参加・交流の機会が広がっていく。制度利用等の大事な相談はラウンジにする、ハローワークを勧められた、希望する地域活動とつながれたなど、自己実現に近づくチャンスも得ている。

・国際交流ラウンジとの接点がない人は、ラウンジがまだない時代に来日した年配者だけでなく、留学生として来日して、日本語学校等の紹介で就業した若い人などもみられる。若い人は、SNS などを情報源にしている場合が多く、必ずしも的確な情報にアクセスできているとは限らない。そのような人たちは、将来への希望を抱きながら、仕事に忙殺されていて、日本語学習や資格試験の勉強時間がとれないなど、自己実現に向けても不利な状況にある傾向もみられる。

・ラウンジとの関わりの有無に関わらず、共通して、若い人の日本語学習に対するニーズは高く、働く人や子育て中の人も参加しやすいよう、日時の選択肢を広げることが求められている。

●日本人側からの関わりについて

・インタビューでは、区内には、地域の NPO や外国人支援団体、外国人対応の医療機関など、行政以外にも外国人のサポーターの存在があることがわかった。地元の小中学校における対応も進んできていることが語られた。

・一方で、自治会・町内会は、「知らない」「誘われたことがない」と、多くの人が語った。インタビューでは、ほとんどの人が、中区を愛し、今後も住み続けたいと希望している。若い人を中心に、地域の祭り等への参加意向も高い。外国人に選ばれる街でありながら、地域の側から外国人の参加を歓迎する動きがあることは、あまり語られなかった。

（2）インタビュー協力者からの提案

インタビュー協力者からは、外国人も主体的に暮らしていけるようになるための提案が、外国人当事者ならではの経験、視点から語られた。

◆言葉の壁への対応について

・住みにくさの一番は言葉。来日した学生が役所に行ってもすぐに住所変更できない。携帯も自分で買えない。大人なのに誰かと一緒でないとできない。

＜やさしい日本語の使用について＞

・会話ではやさしい日本語に期待している。区役所での説明で、漢字で最初の言葉を理解しても「～していただきませんか」と続くとわからなくなってしまう。シンプルに話してもらえると助かる。

・（やさしい日本語と関連して）全部ひらがなで書いてあるとよくわからない。

・やさしい日本語の使用について、敬語はビジネス文書では必要だが、日常会話では必要ない。若い人の日本語はアニメ的で、例えば「東京に行く」は「東京行く」となる。文法は別として、会話は短いとわかりやすい。日本語の翻訳は難しい。同じ言葉で様々な意味がある。やさしい（プレーン、シンプル）な日本語の推進には賛成したい。

＜多言語対応について＞

・英語の表示やマップは、あったらよい。

・日本に来る同胞には英語が話せる人が多い。英語での案内があると助かると思う。

・英語のサポートがあると、自分のような人が生活しやすくなる。

＜外国人への情報提供について＞

・救急車が無料で、各国語対応してくれることは知らなかった。命に係わること。外国語でも救急車が

呼べるということを、周知する必要がある。
・外国人に届く情報が少ない。例えば花火大会など、自分で調べないと情報が得られない。
・ＱＲコードから見られるサイトが充実するとよい。多文化の人々が知り合えるイベントがあるとよい。
・ＱＲコードで情報にアクセスできるようになったのは区の努力。今後も期待する。このような情報の入口があることを知らしめることが重要と思う。
・災害情報を多言語で流し続ける

＜日本語学習について＞

・地域の友だちをつくるため、交流の場が大事。そして、自分で行動をしないと始まらない。地域子育て支援拠点があっても、言葉ができないと自信がなく活かせない。日本語教育が大事。日本語を学べる環境があることを知ってほしい。
・同胞の間では、日本は役所から書類が多く届くが読めない、英語や母国語だったらいい、メールで来てもいいと話している。コックとして来ている人は、日本語教室がもっとあるといいという。
・人によって生活も日本語学習へのニーズも様々。日本語教室に通いにくい人も多い。ラウンジ教室は「時間が合わない」「夜の時間帯がいい」「もっと長くしてほしい」といった希望がある。もっと時間帯を広げられるとよい。塾や家庭教師にお金をかけられない人、家庭にとって、お金のかからない教室の提供は必要と思う。
・日本語教室を調べたが時間が合わない。午後の教室は子どもが学校から帰るため通いにくい。様々な事情があると思う。開催日時の幅が広いとよい。
・ラウンジの「はじめての日本語教室」のコンテンツはよかった。もっと長く学びたかった。ラウンジ教室に通うなら夜がよい。また、オンライン教室があるとよい。
・ラウンジの日本語教室に復帰したいが、現在空き待ち。仕事も忙しく、時間が合わない。

◆日本の制度の活用について

・横浜年金事務所に年金の相談に何度も行ったが、よくわからなかった。日本語だけの問題ではなく、複雑でわかりにくい。

＜制度の説明について＞

・日本の学校の制度や費用を心配する人が多いが、情報が少ない。今は翻訳アプリもあるが、大切なことを翻訳してパンフレットにするとよい。また、入学時前に、受験のことも含め１回セミナーがあるとよい。通訳が入って教育システムを案内するなど。来日前のオリエンテーションも大事。
・保育園から幼稚園に移る際には、大変だった。大学で日本語での講義をしている妻でも難しかった。日本語の問題だけでなく、わからないことが多い。
・区役所から保険に関する通知があったが、細かいことはわからない。日本語と英語での説明があれば理解できると思う。
・留学生等はひとりで来日し、相談する人がいない。健康保険や税金のことなど。ラウンジでのサポートは心強い。
・日本語がある程度わかっても、法律用語等専門的なことはわからない。日本語の熟度に応じてチャートがあるとよいのではないかと思う。例えば「お金」から「税金」に進むなど、わかりやすい言葉から段階的に専門的な用語の理解へと進めるように。
・マイナンバーカードが保険証と一体化する等の制度の変化は、自分は職場の人に聞けるが、会社に行っていない人もいる。生活情報のサイト、多言語の案内があると助かると思う。
・区からの通知を読んでわからない箇所があれば、写真を撮って送ると説明してくれるサービスがある

とよい（専門的なことは行政窓口で直接聞くようになどの仕分けも含め）。
・区役所では、難しい質問をしてわからなければ日本語がダメとみられ、簡単な英語の単語で言葉が帰ってくる。「いかがでしょうか」という気持ちが大事ではないか。区役所のサービスは進んでいると思うが、スタッフの気持ちが大事。
・市民通訳ボランティアは、ボランティアなのか仕事なのかわかりにくい。

＜外国人の市民権について＞

・外国人差別はあるかもしれない。人種、民族による差別、保証人がいないから貸さないなど。
・外国人が日本で家を借りるのが大変難しい。家探しをどうしたらいいか。相談して解決していきたい。
・家を探しているが、3 年居住するまでは買えない。
・住まい選び。外国人は来日時に信用がゼロ。母国での信用もリセットされてしまう。まずほしいのが落ちつけるところだが、そこでつまずいてしまう。外国人にやさしいまちになる第一歩は、来てすぐに住まいを探せること。会社のサポートがあっても選択肢は少ない。本来は自分たちで選びたい。
・中区に限らず、銀行の仕組みが国際基準になるとよい。ハッキングにあった際、クレジットカード、デビッドカードのピンナンバーを変更するため一時帰国しなればならなかった。母国で使っているカードが日本では使えず、義理のきょうだいが来日した際、唯一使える機械があるという銀行まで行かなければならなかった。

◆相互理解、社会適応について

・「日本の気候風土を知らずに困ったことがある」「電車で携帯は NG、リュックは前に持つなど、知らなかった」「日本人は返事が曖昧で内心がわかりいくい、本音と建て前もよくわからない」

＜互いを理解し合うこと＞

・一番大事なことは、互いに理解すること。メディアでも SNS でも、考え方をもっと宣伝してほしい。
・ラウンジでも、いろいろな国の方々が日本の文化を理解し、日本人も外国人を理解し、相互のバランスで暮らしやすい社会に向かっていくことが大事と思う。
・文化の違い、気候の違いを知ること。
・文化が違うので、日本のルール、マナーを知ることが必要。暮らしているところの文化に慣れる必要があると伝えていきたい。
・今はスマホで調べられ、若い人は困ることがないかもしれない。日本語がわからなくても仕事や生活はできるが、若い人は日本語を勉強しなくて大丈夫かなと思う。日本人も英語がわかればよいが、外国人も日本語を学んだほうがよい。外国人は日本語、日本人は英語を使えるようになるとよい。バランスは難しいが。
・日本の教育は、自分で考える、批判（判断）する、創造するというより、まだ、教え込む、憶えさせることに重点を置いていると感じる。子どもの意志、気持ちを優先する方向に進んでほしい

＜交流の機会の確保＞

・ラウンジのイベント等は、同胞だけでなくいろいろな国の人たちが交流し、新しい勉強の機会になる。都合に合う日時に参加できるよう、機会がいろいろあるとよい。
・同じ国の人と話せる場がもっとあるとよいと思う。

＜相談できるために＞

・困りごとは、同胞のネットワークの中で誰かとつながるが、日本人のほうが早いこともある。同胞同士のコミュニティで知られたくないことを相談するなど。
・母国語で何でも相談できる相談窓口があったらいいと思う。自分もよく相談を受ける。

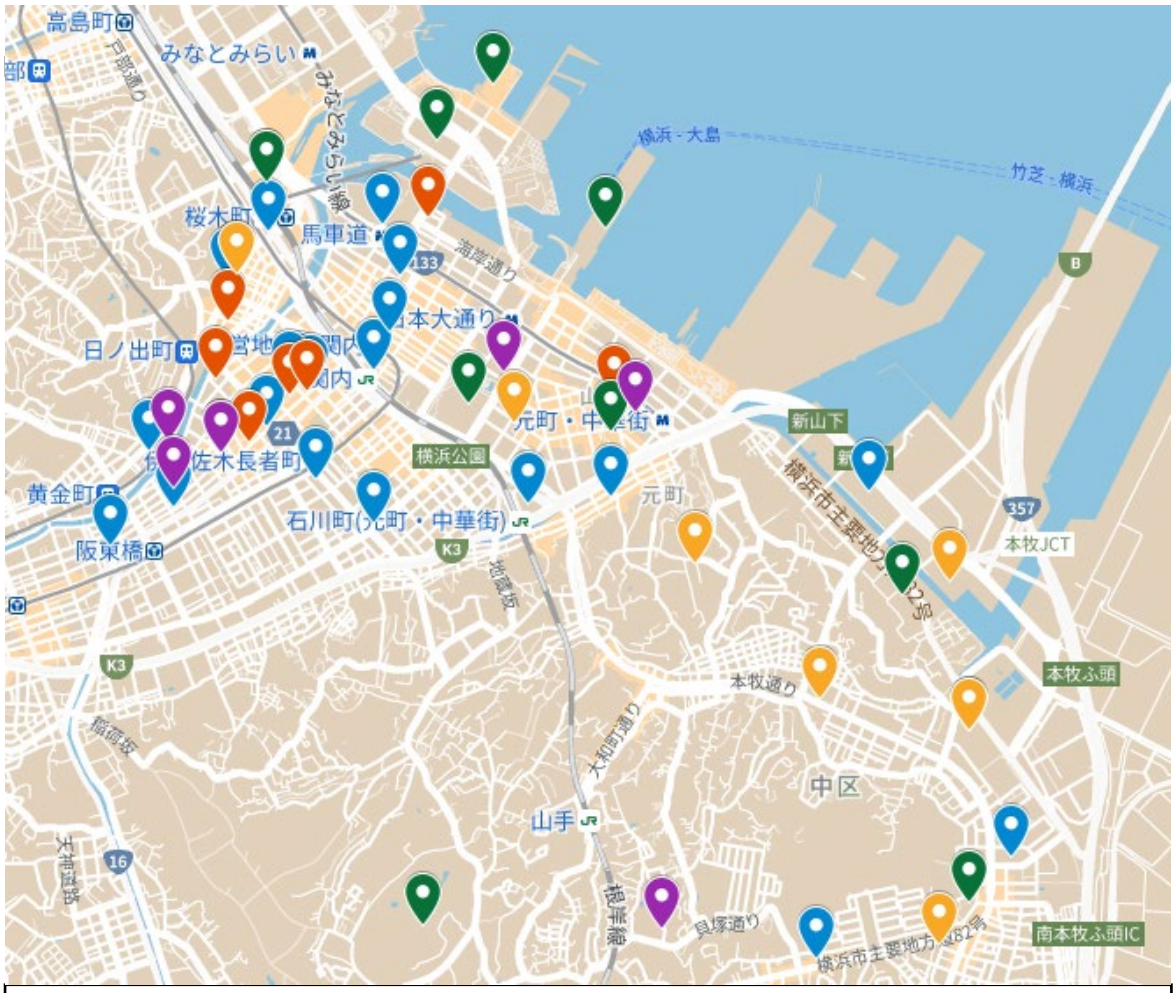
・本当に困ったことを誰に相談すればいいか困っている。小さなことを聞いても迷惑ではないかと。安心して相談できるか悩んでいる。

◆まちづくりに関する提案

・横浜港は欧州の文化が初めて入ってきて盛り上がった歴史がある。そういうエネルギーがある地域であり、伊勢佐木町全体がつながればもっと活性化きるはず。中区は多国籍。日本の文化と韓国、中国、ベトナム、タイなどの文化が一つにまとまれば盛り上がるのではないか。
・自転車をどこに停めたらいいかわからない。
・繁華街に住んでいるが、昔と変わって若い人の店が増え、マンションの上階まで声や煙が上がってくるようになった。マンションの他の住民も感じているのではないか。高齢者や病人もいるかもしれない。せめて時間を制限するなど、改善してほしい。
・(治安がよくないエリアは) 衛生面がよくなったら改善するのではないか。街をきれいにすることで犯罪が防げるのではないか。

(3) 区内でよく行く場所マップ

インタビュー協力者が区内でよく行く場所をマッピングすると次のようになる。



【凡例】 :買い物、 : 飲食、 : 余暇、 : 医療、 : 各種団体

※グーグルマップを使用

２．中区の多文化共生推進に向けた課題から今後を展望する

（1）インタビューからみえたもの

2024 年 6 月より 10 月にかけて中区在住の外国人（20 組 23 人）に、さまざまな角度から中区での生活についてお話をうかがった。厳しい意見が寄せられることも予想されたが、「交通が便利。買い物は 24 時間スーパーもある。図書館へ行くのも便利」「喧噪がないところがいい。街がとてもきれいで公園など自然が豊か」「元町のお店やレストランから日本の街ではない雰囲気を感じた」「住みやすいところと感じた」「区役所の職員はとても親切」など全般的に中区での生活についての満足度は高かった。ほとんどの人が移動の際の交通の便の良さを挙げていたが、自転車を移動手段としている人も多かった。これは主要なインフラが平坦な地域に集中している中区の特徴とも言える。ただ、駐輪場の場所や存在を知らない人もおり、駐輪は今後の課題の一つといえる。

横浜に住むきっかけは、「仕事の都合」や「同胞が多く住んでいる」といったことの他に、「自分は多文化共生と食について研究しており、横浜は人種のるつぼなので居住地として選んだ」という回答もあった。

言葉の壁については、「街には英語、中国語表記が併記されていることも多い」「区役所には英語、中国語の通訳がいるので安心」「困ったことがあればラウンジに相談しにいく」という回答がある一方で、ネパール語、ベトナム語など近年増加傾向にある言語を母語とする人たちアプリ等を活用している人たちも多く、重宝な翻訳ツールとしてアプリの重要性が増している。

日本語学習については、「ラウンジ主催のビギナー向けの日本語教室に通ったが終了後も次のステップの教室を開設してほしい」「技能ビザで来日している料理人たちが気軽に通える地域の日本語教室があればいい」との指摘もあった。

また最初に外国人が苦労するのが「住居探し」「銀行口座の開設」といった生活上の初期インフラで「外国人は日本での信用がないので、住居を探すのが大変」「来日して一番大きな問題は住居。外国人は狭い範囲からしか選べない」「外国人に優しい町として、部屋をすぐに見つけられるといい」「外国人がアクセスできる不動産の情報がなかった」といった声があった。従来から外国人の住まい探しの困難さは指摘されていたが、未だに解決には至っていない。銀行口座開設についても、在留資格にもよるが条件が厳しかったり、各行でも条件が異なったりと、外国人にとってハードルは高いようだ。

子育て面では、「公園に通ってママ友になり、その人から日本での子育て情報を得た。この繋がりにより子育ての負担が軽くなった」という声もあったが、一方でこのようなネットワークがないと、外国人の親たちは孤立する恐れがあるとも言える。その他、言葉の面で子どもの学校との意思疎通に苦労したという回答もあった。また、中学生の特に中国から来日した女性は、日本で育った弟と、日本語のあまり得意でない親との間で、コミュニケーションの面で若干の問題があったと指摘した。

「病気になったとき」は困りごとの代表例だが、自身で、あるいはラウンジを通じて外国語で受診できる医療機関を探し、言葉のできる友人等に同行してもらうことで対応していた。救急については、多言語での電話対応や搬送が無料であることを知らない人も多く、今後の周知課題と言える。

ネットワーク、居場所については、教会、寺院、同国人の集まる組織、レストラン等を挙げた人もいる一方で、「特に同国人の集まりに積極的に参加しようとは思わない」という回答もあった。ネットワークや居場所は外国人にとってのセーフティネットであるが、会社や友人などがその役割を果たしていれば、必ずしも同国人のネットワークに頼らなくてもいいのかもしれない。

また興味深かったのは日本人とのコミュニケーションで、「日本人は相手の気持ちをいつも気に

している」「日本人は集団主義で自分を出せない人が多い」とか、「日本人に当たり前のことは外国人には伝わりにくい。文字にしてほしい」「なぜそうなっているのか理由がわからないことがある」といった感想もあった。日本社会では「空気を読む」に代表されるように、他の言語に比べ「非言語コミュニケーション」が占める割合が高いともいえ、日本人には当たり前の事柄であっても理由説明や言語化が今後より必要とされてくるだろう。

地域（日本人）との交流については、限られた空間での交流はみられたが、多くの外国人にとって文化や言葉の壁により地域社会への参画は容易ではないようだ。地域組織である自治会・町内会については「入っていない。ずっと興味はあるのだが、こちらからは行きづらい」「知っているが、入っていない。誘われたこともない」といったような回答があり、外国人には少し遠い存在のようである。

地域で開催されるイベントについては「友だちもいなかったから、イベントに参加できたのは楽しかった」という声もあり、外国人を対象とした過去の中区区民意識調査からも、住んでいる地域への参画・交流は希望するが、きっかけがなく参加方法がわからないといったこともあるようだ。言い換えれば、地域社会への橋渡しをしてくれれば、積極的に参画したいと考えている外国人は少なくないと言える。

（2）今後の方策

横浜市、中区の現在の外国人人口（2024.11 月末）は 126,634 人、18,631 人。10 年前に比べそれぞれ 1.6 倍、1.22 倍増加している。中区に至っては、全人口の 12.1%、約８人にひとりが外国人住民となっている。外国人の急増とともに地域社会における外国人との共生は重要な課題である。

当協会が中区から受託して運営している「なか国際交流ラウンジ」（以下「ラウンジ」）は、中区の「多文化共生の拠点」として２００８年に開館した。今年度で１６年目を迎えるが、その事業内容は開館以来徐々に変化している。

当初は多言語相談窓口の開設、日本語教室や外国につながる中学生の学習支援教室、国際理解セミナーの開催等、いわばラウンジという「箱」のなかで「点」の事業を展開してきた。

近年はこれらに加え、区役所を窓口として自治会・町内会、地域ケアプラザ、社会福祉協議会、学校等と連携して、ラウンジの地域へのアウトリーチが進み多文化共生を進める「点」から「線」、「線」から「面」のプログラムの比率が高まってきている。そこで、これまでのラウンジ運営及び今回のインタビュー結果から、今後の多文化共生への取り組みを考えたい。

～支援される側から支援する側へ、当事者間の支援サイクルの構築～

言葉の壁が大きく立ちはだかる親の世代に対し、日本の学校生活を体験した子の世代の持つ文化と言語は日本と母国の両方を兼ね備えている。「支援される側」だった彼らが成長し、次のフェーズでは「支援する側」になり、日本社会との橋渡し役を担うことで多文化共生は大きく進む。今回のインタビュー結果からも「今まで助けられた分、今度は自分がボランティアになってサポートできる人になりたい。」という声も複数あった。

ラウンジ主催の「中区・外国人中学生学習支援教室」は、中区の公立中学校に在籍する外国につながる生徒を対象に 2009 年にラウンジでスタートした。卒業生は 500 人を越え、彼らを中心に外国につながる若者たちの居場所「Rainbow スペース」（以下「Rainbow」）が 2018 年にラウンジに発足した。開設当初の学習支援教室のサポーターは主に日本人だったが、現在では約４割は教室卒業

生の Rainbow スペースの若者たちが担っている。

支援される側だった中学生が後輩たちを支援する側に回ったのである。支援と被支援が固定化され二分されるのではなく、当事者が支援者となるサイクルが構築されることでロールモデルが生まれ、継続的な支援も可能になってくる。Rainbow の若者たちは自助活動の他にも地域貢献活動も行っているが後述する。

さらに中区には、日本語が堪能で地域活動に関心を持ち担い手となる外国人が数多く在住している。彼らはラウンジの登録ボランティアや日本語教室の学習者かもしれない。あるいは外国人が多く在籍する小学校や中学校の保護者かもしれない。今回インタビュイーの中には、消防団員として活動している外国人もいた。彼はラウンジの主催する日本語教室の卒業生で、区役所とラウンジが協働で実施した「防災センター」視察ツアーに参加したことがきっかけで入団した。ラウンジや区役所が間に入らなかったら、消防団への入団はなかったかもしれない。

これらは一例だが、地域に参画する外国人が少しずつ増えてくれば、その後を追って外国人の地域参画は進むのではないだろうか。彼らに町内会に関わってもらえれば、キーパーソンになる可能性も出てくる。さらに他の外国人へのアプローチに協力してもらうことで、外国人当事者間の自助、共助の作用を促進するかもしれない。

中学生学習支援教室で卒業生が年を経てサポーターになったように、今後の多文化共生施策の実施にあたっては、非支援者が支援者にまわるサイクルの構築を意識し、担い手として活躍できるような展開も視野に入れることが重要である。

～外国人と地域社会を結ぶ架け橋の存在～

当事者間の支援者サイクルが確立されたとしても、さらにその先、外国人住民が地域社会につながるのは容易なことではない。地域交流に関心のある外国人が地域の集まりに足を運んでも、周囲は見知らぬ日本人ばかりであれば、それ以上足を踏み込むことに躊躇するだろう。一般論として、人は見知らぬ集まり、イベントに参加することに消極的になったり、躊躇したりする。しかしそこに「知り合い」「見知った顔」が存在していれば一気にそのハードルは下がる。今回のインタビューでも「自治会・町内会への興味はあっても、声を掛けにくい」「自治会町内会は聞いたことがあるがわからない。マンション管理組合の会議も参加していない」といった回答が複数あった。

それではどうすれば外国人が地域と繋がることができるのだろうか。外国人と日本人、地域社会を繋ぐ「架け橋」の存在はひとつの答えを示唆している。それでは「架け橋」の担い手はどこにいるのだろうか。

中区には親の都合で来日し公立の小中学校に通う児童・生徒の数は多い。日本語が不自由な生徒も少なくないため、ラウンジではこの間、中区・外国人中学生学習支援教室を通じて中学生の日本語や教科学習支援を行ってきた。彼らの多くは日本語の壁に苦しみながらも、努力に努力を重ね成長している。学習支援教室を卒業した若者たちは、次のフェーズとして「Rainbow」に集約されていく。Rainbow は同じ環境にある若者たちが安心して過ごせる居場所として、彼らの自己表現活動（お互いの交流、映画・演劇制作等の文化活動、２言語でのディスカッション等）を行うとともに、地域貢献にも積極的に取り組んでいる。

若者たちの多くは小学生、中学生の学齢期に来日している。大変な苦労をしながら日本語を学び、日本社会に適応していった。学齢期に国を移動した場合、母語と日本語の両方が不十分になってしまう「ダブルリミテッド」の恐れもあるが、彼らの多くは、母語と日本語のいずれも堪能だ。

日本でも有数の外国人集住地域である中区では、地域における多文化共生は大きな課題である。「外国人住民にも地域のお祭り、防災訓練に参加してほしい」「生活上のルールを説明したい」「自治会・町内会に入ってほしい」など、地域からの要望が区役所、ラウンジに寄せられ、それらの翻訳はRainbowの若者たちが担当することも多い。またイベントの当日、彼らは通訳兼運営補助として地域に入り奮闘している。

行政からの協力依頼も多く、中消防署からの要請で「厨房の火災予防啓発映像」（中国語版）をRainbowの若者たちが日本語版からリメイクして作成した。演技指導は映像制作を専門としている大学生、コック役は高校生がそれぞれ担い、映像制作、中国語のナレーションを若者たちが請け負い、自前で制作したのである。

また中区役所はごみ分別の啓発事業の一環として、外国人住民を対象に関連の工場見学を実施しているが、ここでもRainbowの若者たちが通訳として活躍している。

このような経験は地域に貢献することはもとより、若者たちにとっても日本社会を知る良い機会になる。千葉県君津市の日本製鉄を訪れた際には、通訳をする際の事前学習として、見学先の工場のことを調べ、終了後は通訳をする際の課題をラウンジスタッフとともに振り返っていた。

架け橋になりうる人材は、外国人集住地域の中区には潜在的には数多く存在するに違いない。Rainbowスペースの若者以外にも、例えば複文化、複言語を身に着けたエスニックグループのリーダーもそのひとつだろう。今回のインタビューに応じてくれた南アジア出身のAさんは、留学生として来日し滞在年数は２０年弱にも及ぶ。日本の文化、社会を深く理解し、日本語にも堪能であり現在は日本に帰化している。

彼は本業の傍ら、中区や南区のラウンジに登録しボランティア通訳としても活動するとともに、数百人が登録している同郷の自助グループの中心的な存在でもある。Aさんは日本での生活上必要な情報を母語に翻訳してグループのメンバーに配信しており、まさに架け橋的な役割を果たしている。

外国人と地域社会の言語の壁を低くするには、母語と日本語の双方に堪能な人材の確保が必要になってくる。一例だが、外国人の集住するある自治体では「文化の通訳」の制度を設けている。日本の慣習、文化に精通した外国出身者が、来日間もない同胞に理解を促していくといったシステムである。これらも含めて「言語の壁」「文化の壁」を低くする取り組みは重要であり、架け橋になりうるキーパーソンへのアプローチを継続的に行っていく必要がある。

～ホスト社会の認知～

Rainbowの若者たちは、時を経て支援する側、社会貢献の主体となった。「“区役所が主催するイベントに通訳として関われるなんてすごいね”と親から言われました」と中国につながるある大学生は語った。また中学生の時に中国から来日し、今は大学に通うRainbowのメンバーは「横浜市の成人式で司会をしたことは私の人生で大きな自信になりました」と振り返る。彼女は中区役所が関係する地域イベントに通訳として何度も派遣されており、広報物の翻訳も担っている。それらの経験を通じ日本社会との接点が生まれ、視野が広くなったのだという。行政は地域社会にさまざまなネットワークを有しており、そのルートを活用すれば外国人は地域に参画しやすくなる。ラウンジで発掘された外国人人材が地域に出ていくには、行政のネットワークは不可欠で、その果たす役割は大きい。

若者に限らず外国人全般に「自己表現の場」「活躍の場」を行政や地域といったホスト社会が提示

することで、様相は変わってくる。ホスト社会が地域の外国人を人材として認知したとき、当事者のモチベーションが上がり、それは地域全体の活性化につながり「架け橋」的な存在も増えていくに違いない。行政は中区に住む外国人に対し、共に地域社会を創る人材であるとのメッセージを積極的に発信するとともに、活躍の場を提供する役割がある。

３．むすびに

今回のインタビューで多くが指摘していたのは、「外国人と日本人の双方が知り合い、互いにに理解を深めること」の重要性だった。ネガティブなイメージを持っている日本人の多くは、外国人に直接会ったことがない、知らない人たちなのではないだろうか。そこで多文化共生への「あるべき論」をかざしたとしてもさほど意味はない。遠回りのようでも「顔の見える関係」を一つひとつ丁寧につくっていくことが、結果的には多文化共生への近道となる。行政、ラウンジ、自治会・町内会、地域ケアプラザ、社会福祉協議会、民族団体、エスニックグループ他、地域に関わる全ての個人、組織がそれぞれの役割を果たすだけでなく面として連携したとき、共生への扉が開かれていくだろう。

※Rainbow スペース：外国につながる若者（主に高校生～大学生、社会人）の居場所として、平成 30 年（2018 年）になかラウンジに開設された。主な活動として①映画、演劇、多言語でのディスカッション等を通じた自己表現活動②外国につながる後輩の小中学生の学習サポート活動③複文化、複言語を生かした通訳、翻訳を通じた地域貢献活動がある。

あとがき

本調査は中区に在住する多様な国籍の 20 組の方々にインタビューを行った。
仕事や学業、家事や介護の合間を縫って私たちにご協力をいただいた外国人の方々に、まずは御礼申し上げたい。さまざまな課題を抱えながらも、「中区は外国人にとって住みやすい街です」と語る皆さんの笑顔はとても印象的だった。

一方で、中区転入の際の住居探し、銀行口座開設等の生活上の初期インフラで壁にぶつかること等が課題であるとの指摘もあった。これらは区の課題とは言えないものの、社会全体で改善していく必要がある。

インタビューにあたっては通訳の方々、インタビュイーを紹介して下さったアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、在日本大韓民国民団神奈川県横浜支部の皆さまに謝意を表したい。

令和６年度 中区外国人意識調査 報告書

発行日： 令和 6 年 12 月 20 日
発　行： 公益財団法人横浜市国際交流協会
横浜市西区みなとみらい 1-1-1
パシフィコ横浜　横浜国際協力センター5F
記録・編集：株式会社ティーアールアイ